

# 宇都宮の農具

米作り・麦作り

宇都宮市教育委員会





表 紙

宇都宮市指定有形文化財

『紙本淡彩農作業図』

(昭和54年3月6日指定)

宇都宮市下砥上町7-6-9番地

小林 莊之助氏 所藏

文化財シリーズ第11号

# 宇都宮の農具

平成 3 年

宇都宮市教育委員会



## 序 文

今回、文化財シリーズ第11号としてお届けいたしますのは、私たちの一番身近な生業であった農業に用いる様々な機具を扱った「宇都宮の農具」です。

生業を扱った文化財シリーズといたしましては、第3号で「宇都宮の手仕事」というものがありました。先人がつくりだし、長い間受け継ぎさらに発展継承させてきた技術を扱ったものであり、どちらかといえば個人的な技術伝承です。

今回まとめあげました「農具」とは、個人的な伝承の要素もありますが、手仕事に比べて生活に密着したものであり、より普遍的であるといえます。ひとつひとつの農機具には、長い歴史の中で徐々に改良されて、より使いやすくまた地域の特色に適するようになってきたものであり、その地域におけるひとびとの農業の歴史を端的に表してもいるのです。

しかしながら、昭和三十一年代から始まった農具の機械化は、その導入があまりにも急速であり、かつ農民の労力を大幅に減少させる結果になったため、伝統的な農具がほとんど使われない、ということになってしまいました。また農家のシンボルでもあった蔵やアマヤもここ近年、耐久年数に近づいたものもあり、取り壊されたり、建て替えがなされたりしていますが、その際に古い農具が処分されてしまうことが多いようです。処分される他の理由としては、どの家も持っているものであり特に目新しいものではなかったこと、保管がコンバインや乗用田植機などといった最新式の農具の邪魔になるというようなことが挙げられるでしょう。

今回消えつつある農具を見直す一助になれば、という願いを込めてこの冊子にまとめあげました。今後は可能な限り、宇都宮市域で使用された農具の現物保存に努めるとともに、現物保存が不可能なものは本冊子の様に記録保存としていきたいと考えておりますので、多くの方々の御協力を心より願う次第です。

最後になりましたが、今回の調査及び本冊子の刊行にあたり、御協力いただきました宇都宮市文化財調査員の方々、また調査の際に貴重な時間をさいていただきました多くの方々に、心から感謝の意を表します。

平成3年6月

宇都宮市教育委員会

教育長 藤田 昌平

# 目 次

序 文	
まえがき	3
I 『宇都宮の農具』の調査について	
1 目 的	4
2 調査対象	4
3 調査方法	4
II 宇都宮の農具	
1 昔の米作り（水稲）	
(1) 種蒔きまで	6
(2) 田植えから草取りまで	7
(3) 収穫・脱穀・調整まで	12
2 昔の麦作り	
(1) 種蒔きまで	15
(2) 麦刈りまで	15
(3) 脱穀・調整まで	16
3 農具の解説	
(1) ビッチュウグワ	17
(2) マンノウ	17
(3) エグワ	18
(4) ヤシュウグワ	18
(5) オオガンゴ	19
(6) ナエトリカゴ	19
(7) ハガマ	20
(8) ノコギリガマ	20
(9) オオガマ	20
(10) コエオケ	21
(11) テンピンボウ	21
(12) ナエヒキイタ・ナエヒキブネ	22
(13) クルリボウ	23
(14) ツチカケ	23
(15) ニグラ	24
(16) ビク	24
(17) ウネタテ・ウネヒキ	24
(18) ナラシボウ	25
(19) ゴミツキ	25
(20) マンガ	26
(21) フリマンガ	26
(22) オオグワ	27
(23) キズルス	28
(24) ドズルス	28
(25) センバコキ	29
(26) アシブミダッコクキ	29
(27) ジョソウキ	30
(28) クルママンガ	31
(29) モッコ	31
(30) クロナデ	31
(31) センゴク	32
(32) トウミ	32
(33) ミ	33
(34) フォーク	33
III 農耕に伴う儀礼	
1 冬から春にかけて	34
2 春から夏にかけて	38
3 夏から秋にかけて	39
4 秋から冬にかけて	41
IV 参考資料	
1 宇都宮の農事暦	43
2 協力者一覧	44
あとがき・参考文献	45

# まえがき

本冊子は、昭和61年に宇都宮市教育委員会が、市文化財保護審議委員会の答申を受け、市文化財調査員活動の一環として実施した「農機具調査（課題別一斉調査）」の結果をもとにまとめたものです。

同調査は、市内全域を対象として実施され、全部で237件の報告がありました。本冊子はこれに事務局職員が調査したものも加えて掲載いたしました。

本冊子は、厳密な農具調査の報告書ではありません。市民の方々に、昔の農作業のおおまかな姿を理解していただきながら、それに伴う農機具を分かり易く説明したものです。

なお、この「農機具調査」は以下の組織で調査をしましたが、現地調査において多くの方々の御協力を仰ぎました。特に調査票の分類・整理に関しては、前文化振興係嘱託の森本久夫氏にお願いたしました。また内容や写真については栃木県立博物館主任研究員の柏村祐司氏の御指導を仰ぎました。ここに御礼申し上げます。

また、冊子中の写真のうち彫り物は瓦谷町の天棚の外欄間で、絵画は紙本淡彩農作業図（小林丑之助氏蔵・下砥上町769）の部分です。また、一部の写真は栃木県立博物館、瀧田浩二氏（下栗1丁目）、阿久津義正氏（篠井町853）から借用したものと、今回高橋幸一氏（瓦谷町1120）にモデルになっていただき撮影したものを含んでいます。記して謝意を表します。

## ● 宇都宮市文化財保護審議委員会委員

雨宮義人（委員長）	岩崎良能（副委員長）	大金宣亮（委員）
小林幹夫（委員）	戸田博亘（委員）	富祐次（委員）
橋本澄朗（委員）	堀静夫（委員）	森谷憲（委員）
渡辺安友（委員）		

## ● 宇都宮市文化財調査員

河合芳幸（一条）	塚田宗雄（陽北）	酒井光一（旭）
繪面昭男（陽南）	石川秀男（陽西）	高藤常松（星が丘）
松本文一郎（陽東）	小林哲夫（泉が丘）	糸川弘明（宮の原）
菊池正仁（平石）	坂本恒一郎（清原）	石川純雄（横川）
坂寄悦男（瑞穂野）	平塚良雄（豊郷）	小塚博（国本）
高山伝治（城山）	福田操（富屋）	阿久津義正（篠井）
松本笑悦（姿川）	小島豪市郎（雀宮）	<（ ）内は担当地区>

## ● 宇都宮市教育委員会文化課職員

安達光政（文化課長）	・定岡明義（文化財保護係長）	・手塚英男（同係指導主事）
梁木誠（同係指導主事）	●小松俊雄（博物館建設推進係指導主事）	・大塚雅之（文化財保護係指導主事）
神野安伸（同係指導主事）	・今平利幸（同係指導主事）	・高野左千流（嘱託）
小林祐子（嘱託）	・間彦克子（嘱託）	・金田浩子（臨時）

< ●編集担当者 ●主務者 > 一平成3年度一

# I 『宇都宮の農具』の調査について

本冊子は、宇都宮市文化財調査員活動の一環として実施した「昭和61年度課題別一斉調査」のテーマ『宇都宮の農機具』の結果をまとめたものであり、調査要項及び本冊子の編集方針は次の通りである。

## 1 目 的

農具というものは、農業の進化に伴って発展継承されてきたものです。しかし、近年の急速な農具の機械化により、その多くが廃棄されたり、使われずに放置されている現状です。そこで、農具そのものに焦点を当てて、農具そのものの機能や役割を、農作業を通して調査しまとめてみました。

## 2 調査対象

『農機具』の調査対象は、以下の基準を設けて行いました。

- ・作物に関係なく農作業に用いる（た）もの。
- ・農作業のみでなく信仰にも用いる（た）もの。
- ・個人で工夫して製作したもの。

なお以下のものは、今回の農具の対象からはずさせていただきます。

- ・近代的な工場で生産された、エンジン等の動力で動くもの。
- ・破損の程度が甚だしいもの。

## 3 調査方法

### (1) 調査

調査は直接現地に行っ  
て聞き取り調査を中心  
として行いました。なおそ  
れと並行して写真撮影や

## 農機具調査票

調査日	昭和 年 月 日 ( )	調査地	宇都宮市
調査者	氏名	所有者	氏名
(ルビ)		☎ ( )	
1、名 称			
2、使用目的	ア、鋤用具 イ、加作用具 ウ、稲作用具 エ、儀礼用具 オ、その他 ( )		
3、具体的な 使用目的			
4、使用状況	ア、使用中 イ、使用していない(明・大・昭 年ごろまで使用)		
5、保存状況	ア、良好 イ、普通 ウ、不良 エ、破損		
6、保管場所			
7、保存の 必要性	ア、必要 イ、不要 (ア、永久保存 イ、しばらく保存した後廃棄 ウ、すぐ廃棄)		
8、そ の 他			
調 査 地 略 図		農機具の略図・写真等 (寸法および部分名称等)	

『宇都宮の農機具』調査票



スケッチ、計測なども行いました。

(2) まとめ

「農機具調査票」に調査結果を記録し、写真やスケッチを添付しました。

(3) 調査地区

調査地区は宇都宮市全域で行いましたが、各調査員は原則として、担当地区内の調査を行いました。

(4) 調査結果

調査員からは200件を超える調査報告書が提出されました。それらの内容については下の表のとおりです。この報告書に事務局の調査を加えて、本冊子にまとめました。なお、冊子の内容は農作業が機械化される以前の農作業の様子を中心に分かり易くかつ簡単に記載して、農作業ごとに農具の写真や図版および説明を加えました。農作業の様子や農具の説明の時代については、一応農作業が機械化される以前のものとして記載した関係上、一文章中の記載でも同時代のものではない場合もあります。

また、農具や農耕に伴う儀礼のなかで、地元の人々が呼んでいる名称については、カタカナ書きとしました。これらの中には共通語に当てはまらないものもあり、分かりにくい場合にはカッコ内に漢字で表しておきましたので、御了承の程お願いいたします。

種 類	内 容	数 量
畑作関係	野州鍬、踏鋤、マンノウ等	88件
綿作関係	綿種取り機、綿繰機等	5件
麻作関係	オブネ、麻切り包丁、鉄砲釜等	6件
干瓢関係	干瓢むき機、手回し干瓢むき機等	3件
稲作関係	マンガ、クロナデ、苗引き板、のこぎり鎌、イネコキ等	72件
そ の 他	荷車、ムシロ織機、マス、ザル等	63件
合 計		237件

『宇都宮の農機具』調査集計表（注 上表は調査員の調査表に分類されているとおりに振り分けたもので、だぶって使用されるものも一種類として記載してある）

## II 宇都宮の農具

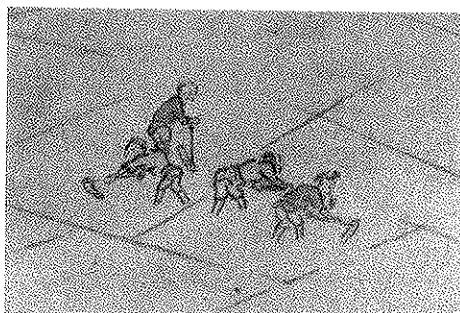
### 1 昔の米作り（水稲） ※ ゴチック体は、本節3（農具の解説）で記した農具です。

#### (1) 種蒔きまで

米作りは、前年の収穫が本当の出発点です。また新年に入ってから、1月11日のカラスヨバリ（烏呼ばり）や15日のドンド焼きなど、豊作を祈る行事が続きます（詳しくは「III 農耕に伴う儀礼」を参照してください）。

田起こしはタウナイ（田うない）とも呼ばれ、旧の2月（現在の3月）ごろや八十八夜の十日前などが一つの目安でした。馬や牛（馬が多い）の力を使う時には馬耕犁（オオグワ）を用います。馬の手綱を持つ者をハナドリ（鼻取り）といい、子どももこの役を多く引き受けます。犁の部分を受け持つのは大人の男の人で、最初は土が固いので犁を押しえつけているのにかなりの力を必要としました。この馬耕犁は田の隅の所がうまく田起こしできないため、隅の部分は人力で行うことになります。このことをワクギリといい、ピッチュウグワ（備中鋤）やマンノウ（万能）などを多く用います。この後苗代を作るわけですが、宇都宮では苗代のことを一般にナーシロと呼んでいます。ナーシロは田植えをする苗を育てるところで、水の便の良い水口（水の取り入れ口）に多く作られます。またこの水口に豊作の祈願として、お札を竹にはさんだものを立てます。この事をミナクチマツリ

（水口祭り）といいます。お札は家にあるものならなんでも良いというところもありますし、河内町中里の羽黒山神社のお札（前年の11月23日のお祭の時に受けてきたもの）に限るというところもあります。昔はどこでも見ることができましたが今日ではほとんどみかけることはなくなりました。ナーシロの田起こしをして水を入れ、マンガ（馬鋤）を馬耕犁同様馬や牛に引かせて泥をかきならします。また昨年のもみ殻や草を土の中に押し込んだり、土を平らにならすためにゴミツキ（ごみ突き）やナラシボウ（ならし棒）を用



タウナイ



ナーシロカキ



タネモミツクリ

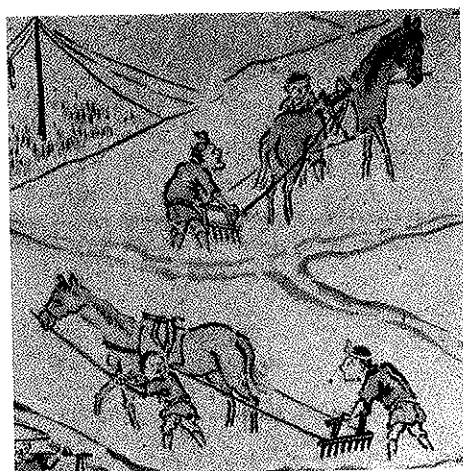
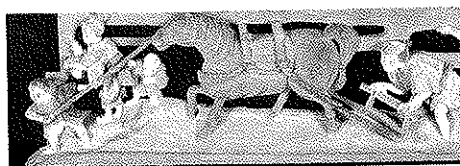
います。そうして水をたっぷりいれてわざとあふれさせ、ゴミを流してしまいます。この時にヤシュウグワ（野州鍬）でナーシロのクロ（畦）を整えます。鍬をクロに押しつけるようにして形を整え、水漏れがないようにした後クロナデで形の仕上げをします。一段歩（約991.7㎡）の田圃当たり22～25坪（約66～83㎡）のナーシロが必要であるということもあり、ナーシロの中は3～4尺（約0.9～1.3m）の幅の短冊状に種もみを蒔きます。

種もみは愛国、撰一などが昭和の初期に優良品種として多く使われました。なかでも愛国は数多く作られました。ノゲがあるために刈り取り後の処理が大変だったそうです。他には早稲ではフジワセ、藁取り用に日本糯や奥撰一なども用いました。前年に収穫した種もみは、粉俵や臥などに入れておき、主に蔵の中やウマヤ（厩）の上などに保存しておきました。近年ではほとんどが紙製の袋を用いているようです。

種もみを蒔く前に、もみを必ず水に浸します。これはもみを柔らかくすると同時に最終的な選別も兼ねています。水に浮いたもみは不良品として廃棄し、沈んだものだけを蒔くわけです。なお水に浸すのはせいぜい一日程度であるといいますが、もっと長い間つけておくというところもあります。この方法を淡水選といいますが、また真水ではなく塩水を用いる塩水選を行うところも多くあります。変わった例としてはもみをオケに入れて塩で洗うというところもあります。これはもみを消毒して病気がでないようにするためで、その後真水に浸します。水に浸したあともみをアゲショギザルであげておき、ナーシロに蒔きます。

## (2) 田植えから草取りまで

田起こしの後、田植えまでの間にいくつかの作業を行います。特に重要なのはシロカキです。田圃に水を入れてから、マンガ（馬鍬）を馬や牛に引かせますが、馬の利用がほとんどでした。しかし、ドブツタ、ヌカッタ、ヌカリッタなどと呼ばれている湿田の場合は、馬だと足が深く入ってしまいケガをすることがあるので、ひずめが開き足の抜けが良い牛にマンガを引かせたところもありました。シロカキは市内では2回から3回は行ったようです。3回の場合は順番にアラクレ、ナカシロ、ウエシロと呼び、2回の場合はナカシロを省略しています。数の多い方が雑草予防になったそうですが、特に水の便が悪いところでは、水を田圃に入れられる期間が短かった



シロカキ

ために、たった1回のシロカキで田植えを行なわざるを得ないところもあったようです。

3回のシロカキの間にもいくつかの作業が入ります。アラクレの前後に畦を整えるクロヌリおよびマヤゲイレ（肥料入れ）があります。まずクロヌリはナーシロの時と同じで、田の畦を整えるために行います。野州鍬をクロに押しつけるようにして形を整えますが、クロナデやクロオンなどと呼ばれる道具を仕上げとして用いることもあります。

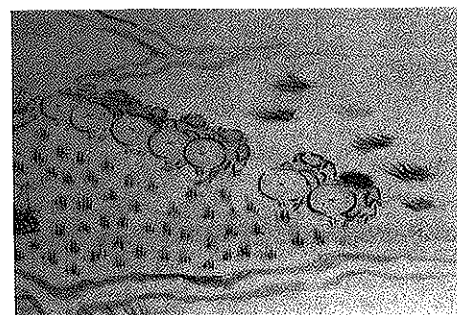
青草・落葉・糞（稲、麦）などをウマヤに入れておくと、馬が踏んでくれるので繊維が充分にこなれ、馬の糞尿も混じり合い、質の良い肥料になります。これを一般にマヤゲといいます。青草はヤマや田の畦などの草を草刈り鎌で刈ったものです。落葉は秋から冬にかけて木の葉さらいをしたもので、キノハカゴ（木の葉籠）に入れて運びます。これらのものは数週間ウマヤに入れておいてからフォークやマンノウで外に運び出します。運び出されたマヤゲは一部小屋の中に入れておく例もありますが、ほとんどが庭の隅に露天のまま高積みしておきます。特に正月の14日には、積まれたマヤゲの上に、ヌルデの木を削って花が咲いているように加工したアーボウ・ヒーボウ（粟棒・稗棒）を挿して豊作を祈ります。また年が改まって初めてマヤゲを出すことをマヤゲダシといい、小正月の最終日にあたる16日（ダイサイニチ≪大斎日≫）に行われるのが普通です。さて、マヤゲイレは馬で運び田に直接入れる方法と、人力で運び入れる方法があります。馬で運び入れるには、馬に荷鞍（かゝり）をつけそこにビクをわたし、田の中でビクの底を開いてマヤゲをあけますが、左右のバランスを考えながらあげないとビクが落ちたり、馬が倒れたりしたこともあったそうです。人力の場合はモッコなどを用います。なお、人糞を肥料とする場合に、これ運ぶ桶のことをコエオケといい、テンピンボウの両端に一つづつつけて、肩に担いで運んだり、大八車やリヤカーに乗せて運んだりもしました。

3回のシロカキがおわるとナーシロの時と同様に、ゴミツキやナラシボウなどを用いて、昨年（こぞ）の稲株を上の中に押し込んだり、上を平らにして田植えがしやすいにします。

いよいよ田植えになります。田植えの目安は、種蒔きの後40日から50日ぐらいでした。このころになると苗が適度の大きさに育ってきます。田植えは、現在では乗用の田植え機が普及してきているため、一人でも一日に広い面積の田植えができるようになりました。しかし機械化前は、田植えを短期間でかつすべて人の手作業で行ったために、多くの人手と大変な労働が必要でした。そのため、とても家族だけの労働力では足りないために、ユイ（結）やユイドリといって、田植えの協力組織ができていたことが多いようです。主に親戚や同じ組内で組織されるようで、互いに労働力の提供をしあうもので、金銭の授受を伴わないのが普通です。ユイドリでも足りない時にはテツダイ（手伝い）といってお金を払って人を（主に女性）雇うことも多く見られました。たいていのムラでは、仲介をする女の人が出て、「何月何日に田植えをしますので、何人のテツダイをお願いします」と、前もって頼んでおきました。田植えをする日は、どうしても短期間に集中してしまうために、所によっては前年の暮れから田植えの日を決めてしまい、テツダイを頼んだという例

さえあります。なお、田植えをする女性のことをソオトメやサオトメなどともいい、普段の農作業とは違った服を着ました。上に着るものは昔はナガギを用いましたが戦後はハンギリになりました。どちらの場合も新しいものを用いることが多く、若嫁の場合などは袖口が白く見えるようなものを着ておしゃれをしたようです。下はやはり新しいモモヒキやモンベをはくことが多かったようです。手さしに緋かすりの前掛けをして、たすきは真っ白いものであり、頭は手拭いを被った上に菅笠をつけました。また、足にはほとんど足袋をはかず、裸足のままで田植えをしました。正装して田植えをすることによって、秋の豊作を祈ったのでしょう。また、女性が主になって田植えをするのも、子どもを産む女性にあやかった豊作の願いの一つと考えることもできます。

田植えの当日は、朝2～3時という早朝から準備が始まります。たいていの家では嫁が一番に起きて仕事にとりかかります。朝食の準備やユイドリの人やテツダイを頼んだ人への御馳走作りをして、ナーシロへ行って苗取りをします。一般に「朝飯は苗取りの後だ」ということを良く聞くことができます。苗取りは、田植えの苗をナーシロから取ることで、田へはクサカリカゴ（草刈り籠）やナエトリカゴ（苗取り籠）などに入れたり、テンビン（天秤）で担いだりして運びました。田植えをしている人に運ぶ時には、ナエヒキイタ（苗引き板）やナエヒキブネ（苗引き舟）を



タウエ

用いましたが、これを引く者をタロウジやタロジと呼んでいました。さて、田植えの方法は時代によりかなり異なります。また同じ宇都宮市内でも技術の取り入れの遅速があり一概には言えませんが、昭和初期からの田植えの方法を示せば以下になります。なお、手押し式田植え機が入るまでは、すべて手作業による田植えでした。



ソウトメのいでたち

- (a) 植え手が横一列に並び、目見当で植えていく方法。
- (b) 印を付けた縄や、木の杵を見当として植えていく方法。
- (c) 動力の無い機械で植えていく方法。
- (d) 動力の付いた機械で植えていく方法。

(a)の方法は、四つの方法のうち一番古い方法です。田の中で植えつける人が横一列になって、一人がだいたい横に7株ほど植えつくと後ろに下がり、今度は逆方向にやはり7株植えていくことを繰り返す方法で、早く植えつけることができるのですが、株間や苗間がばらばらになりやすいために、除草機の利用や馬や牛の畜力を用いるようになると、株間や苗間を整えるために、この方法はほとんど用いられなくなります。またこの植え方は田の端（畦に近い方）が苗を植えつける本数が少なくてすむために、この場所が好まれる傾向にありましたが、やはりテツダイの人がこの場所を占めてしまい、嫁はどうしても中央部の広い場所を受け持たせられることが多くあったと聞きます。

(b)の方法は、長い縄を用意して、縄に苗を植える間隔の印を付け、畦と畦の間に渡し、縄の印に沿って植えつけていくもので、一列を終了し次の列に移る時は、縄の端に付けてあるサンボウ（差し棒）や、サンカクジョウギ（三角定規）というものを当てたりして間隔を取りました。しかし、一列ずつはかっていたのでは作業の進み具合が悪いので、基準となる列を縄で植えつけた後、数列は目分量で植えていき、また縄で基準の列を植えていく、というようになってきました。木の杵を使って植えつける方法は、タウエワク（田植え杵）と呼ばれるものを使って直接田の土に印をつけました。またセンビキキ（線引き機）なども用いられました。これらの植え方はナワウエ（縄植え）やセイジョウウエ（正条植え）などと呼ばれ、稲の株の間の草を機械や牛馬の畜力で取るために考案され、労働力の削減が図れるために急速に普及していきました。

(c)の方法は手押し式田植え機を用いるもので、一条（一列）植えや二条（二列）植えなどが中心でした。機械自体には動力が付いておらず、人が田植え機を前に押す力で機械の腕が苗を植えつけていくものです。柔らかい田の中で重い機械を押すのは大変な労働でしたが、人力で一本一本腰を曲げながら植えつけるよりは楽なために、急速に普及していきました。しかしそれと同時に農村の相互扶助という考え方が、だんだんと薄れていく原因にもなったことは否めません。

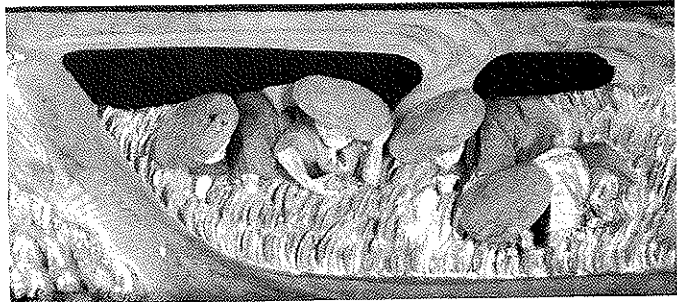
(d)の方法は動力の付いた田植え機を用いるもので、大きく分けると手押し式のものと乗用の二種類に分けることができます。手押し式の田植え機は、エンジンの力で自走するため、人は機械の後ろからレバーを握って進む方向やエンジンの力具合を調整するだけになりました。ただ人は楽になったとはいえ田の中を歩いていかなければなりません、比較的小回りがきくため、小さい田や構造改田されていない田では現在でも田植えの主流



として利用されています。一方乗用タイプの方はトラクターのように人が乗って田植えをするもので、四条とか六条のように一度に多くの植えつけをすることができますが、大型の田や構造改田された四角い田に向いています。

さて、田植えを済ませて一段落するとすぐに雑草が生えてきます。田の除草のことをタノクサトリ（田の草取り）やジョソウ（除草）、クサトリ（草取り）などといいます。田植えの二十日後ぐらいから始めて、2～3回は行うといいます。それぞれイチバングサ、ニバングサ、サンバングサ（一番草、二番草、三番草）などと呼んでいます。もともとは人の手で一本一本草を抜き、「稲の肥やしになる」と言って、土の中に押し込みました。押し込むのは真っ直ぐ下に押し込むと草が出てしまうこともあるので、下に押し込んだ後少し横にひねると良いといいます。また土に手で押し込み、足で踏みつける方法もあります。またサンバングサぐらいになると、草の丈も大きくなってくるので、上に押し込むだけでなく、クサカリカゴ（草刈り籠）の中に入れてたりもします。戦後は人手による除草だけではなく、ジョソウキ（除草機）や馬や牛の力を用いたりもしました。

「クサトリは本当に大変だった」という話は市内の各地で聞くことができます。現在では農薬の散布で除草をするために、昔の苦労は分からなくなってきていますが、夏の日中に水につかりながらのクサトリは、普通の草むしりとは比較にならないくらいの重労働で、自分の家の労働力だけでは足りずに、ユイドリを頼んだところさえありました。ですから正条植えが普及したから、機械や畜力による除草が始まったのではなくて、機械や畜力による除草を行うがために正条植えが普及したと考



タノクサトリ

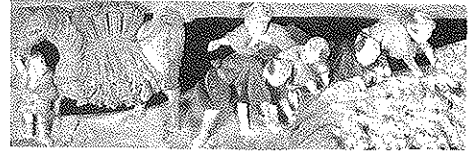
えるほうが正しいようです。

### (3) 収穫・脱穀・調整まで

秋になり、稲の穂が黄金色に変わり、穂が重く頭を下げるころになるといよいよ稲刈りが始まります。稲刈りの目安としては、早稲が二百十日から二百二十日頃、中稲が秋の彼岸頃、晩稲が秋の上用の頃といわれていますが、年により若干の早い遅いがあります。刈り取る時は歯が鋸の歯のように細かいギザギザのあるノコギリガマ（鋸鎌）を使います。ノコギリガマはハガマ（刃鎌）に比べて頻繁に研がずにすむということや、根元の固いところでもたやすく刈れるので、ノコギリガマの使用がほとんどでした。また現在でも、コンバインの刈り取れない隅の部分にはやはりこのノコギリガマが使用されています。刈り取る時は稲の株の大きさによって違いますが左手で4～6株を握り（特にやせている田圃では10株もつかんだというところもあります）、右手で持ったノコギリガマで根元から刈り取ります。稲刈りは家族内での労働が中心になりますが、戦前はこの稲刈りと麦の種蒔きや場所によっては麻引きの作業が重なったために、家族だけでの労働力では足りず、ユイドリを頼んだり金銭で人を雇うテツダイが行われたところもありました。また、当時の青年団が稲刈りを手伝って回ったところもあり、貴重な手助けとして重宝されました。しかし、早朝から稲刈りをしても終わらず、夜にあかりを灯して刈り取ったなどという話も聞くことができました。

刈り取った稲は、根元のところを稲藁で束ねますが（束ねることをまろうとかまるくという）、これをイッツラとかマツツラなど呼びます。このまろった稲束を干すのは、ハデガケやサデガケといって、竹や木の丸太を三本に組んだものに横木をわたり稲束を架けて干すという方法ですが、この方法は比較的新しいといわれています。

それ以前は、ポチモリやジボシ、カッボンなどという方法で、刈り取った稲をそのまま直接地面に置いて干しました。この場合ポチモリは稲の穂を重ねて盛るようにしたもので、ジボシやカッボンは刈った後の稲の株に穂を乗せており、できるだけ穂自体を土につけずに乾かそうとする工夫が伺えます。乾かしておくのは、天気良ければ二日程度、雨

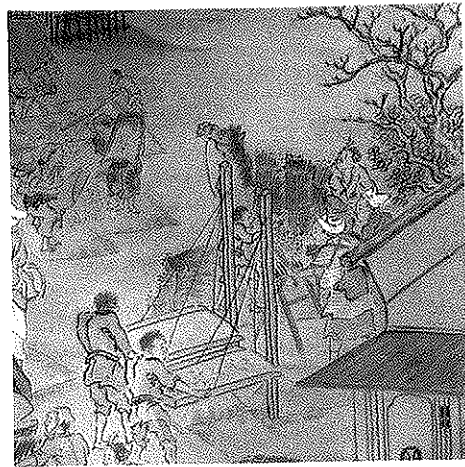


イネカリ

が降ったりすれば、乾くまで数日間そのままにしておきます。そして充分乾いた後に藁で稲を束ねて、脱穀にかけました。

脱穀とは、稲穂から籾を取り去ることで、現在では乗用コンバインで刈り取りながら自動的に脱穀もしてくれますが、これも時代により様々な方法で行われました。センバコキ（千歯扱き、カナゴキとも言う）を用いたのは、大正時代から昭和の初期で、その後足踏み脱穀機（アシブミやガーコンとも言う）や手回し脱穀機などを用い、モーターや発動機で回す動力脱穀機へと移っていきました。特にセンバコキを用いる時は大変で、一人一日でどんなに頑張っても限界があるために、ユイドリも多くのところで行ったようです。また手回し脱穀機も籾を取るためのドラムを手で回さなければならないために、本当に大変な労力であったといえます。それだけに足踏み脱穀機が普及したときは本当に楽になったと言われています。脱穀の場所は、運搬の手間がいらぬことや稲藁の始末がすぐできる田で行う事が多いようでしたが、天候に左右されない点や夜なべ仕事もできる屋内での脱穀も行われていました。脱穀の時に籾だけでなく、穂まで一緒に取ってしまった場合には、その穂を並べクルリボウ（ボウジボウ、フルチボウなどとも言う）ではたいて籾粒を取りました。この作業は<sup>むしろ</sup>箆の上で行うのが普通ですが、なにも敷かず直接土の上ではたいたという話もあります。そのために普段からいつも気を付けて庭をきれいにしていたそうです。

脱穀が終わった籾は、庭に干して十分に乾燥させます。一般には庭中にむしろを敷き詰めて干します。この時、籾を均一に箆の上に広げるためにはナラシボウ等を使いますが、一日に2～3回程度ナラシボウ等で籾をかきまわして、どの籾も十分に乾くようにします。このことをホシモノガエシ（干し物返し）やモミガエシ（籾返し）などといいます。干す日数は天候にも左右されますが、1～3日程度が多いようです。この時、ノゲがある愛国という品種の場合には、クルリボウで打ってノゲを取っておきます。また、わざと風のある日を選んで干すことにより、自然の風の力で籾とごみを選り分ける工夫をしたところも



ダッコク

あります。

十分に粉が乾燥すると、玄米と粃殻を選り分けるために粃摺りが行われます。現在では機械の力であつという間に粃摺りが終わってしましますが、昔は当然のことながら人力で粃摺りをしていました。江戸時代の中頃までは、木製の臼の中に粉を入れて<sup>（碓）</sup>壓碎<sup>（碓）</sup>でつく<sup>（碓）</sup>搗臼<sup>（碓）</sup>や木製の摺臼であるキズルス（木摺臼）を使っていたが、後半期に入ると土製の摺臼であるドズルス（スルス）と呼ばれるものを使っていました。臼の上から粉を入れて臼を回転させると臼の間から玄米と粃殻が分かれて出てくるものですが、能率はあまり良くなく夜なべ仕事までしてどんなにがんばっても一日十依はできないといひます。ドズルスは3人で回すのが楽にできたといひますが、しかたなく2人で回す場合には、能率が悪く



チョウセイ

大変に疲れたといひます。粃摺りの後は一緒になった玄米と粃殻などのゴミを分けなければなりません、それには主に<sup>（唐箕）</sup>唐箕を用いました。唐箕の中にある羽根を手で回してそれで起こる風<sup>（唐箕）</sup>の力で選り分けをします。なお、少量の選り分けや唐箕が普及する以前には、箕を用いていました。竹や藤を使って作られたもので、現在でも良く使われています。選り分けは唐箕の他にセンゴク（千石）やマンゴク（万石）と言われているものでも行いますが、これは斜めになった網の目に、上から玄米と粃殻の混ざったものを流し込むことによつて、玄米だけ下まで転がり粃殻は途中で網の目から落ちてしまうものです。しかし唐箕ほど普及はしていなかったようです。

脱穀・調整された玄米は、供出分に関しては主に冬の夜なべ仕事で編んでおいた依に入れます。また自家消費分については<sup>（俵）</sup>俵などに入れて蔵に収蔵しておきました。

また稲穂を取った稲藁については、田に円錐状や円筒状に積み重ねておいて（ノウやワラノウなどと言ひます）、そのまま冬を越させ、藁細工や屋根の材料、細かく刻んで堆肥と混ぜたりして最後まで有効に使ひました。

## 2 昔の麦作り ※ゴチック体は、本節4（農具の解説）で記した農具です。

栃木県は、全国でも有数の麦作県です。現在では、麦畑もあまり多く見ることはできなくなりましたが、少し前までは米作りの裏作として多くの農家で麦作りをしていました。麦は米作りと一年間の季節のサイクルがちょうど反対にあります。つまり、米は春に種を蒔いて秋に収穫しますが、麦は秋に種を蒔いて春に収穫します。田を休ませることなく、春から秋までは米作り、秋から春までは麦作りと有効に一年間活用しました。麦の種類は現在ではビール麦の作付が多いのですが、以前は大麦や小麦の作付が大半を占めていました。

ここでは、大麦や小麦の種蒔きから収穫までを簡単に見ていきます。

### (1) 種蒔きまで

麦を作る土地を種蒔きに適した状態にする地ごしらえは秋、米の収穫期以後だいたい十一月前後の頃になります。犁を馬で引かせたり、エグワで土を起こすことから始まります。エグワで起こしたばかりの土はまだ大小の塊のままであり、また稲作の後に麦を作る場合は稲の株が残っているために、マンノウなどで土の塊や稲株を細かくします。次にマンガを何回も引いてさらに土を細かくしますが、このマンガも畑作に適したものとして、歯の部分的車状になっているクルママンガなどがあります。また角材を杵状に組んだものに数列歯を付け、両方に紐を付けて二人で向かい合ってフリマンガを大きく左右に振り表土をごく細かくするためのフリマンガ（ホロマンガ）も用いられます。

土の表面がきれいになったところで、ウネタテ（畝立）をします。この時人手が十分にあるときはクワ（鍬）で行いますが、一般にはウネヒキ（畝引き）で行います。種はそのまま蒔くのではなく、堆肥と種を混ぜたものを用いました。種を蒔いた後土をかけますが、昔は足で土を寄せただけだったそうです。後にはツチカケなども用いました。

### (2) 麦刈りまで

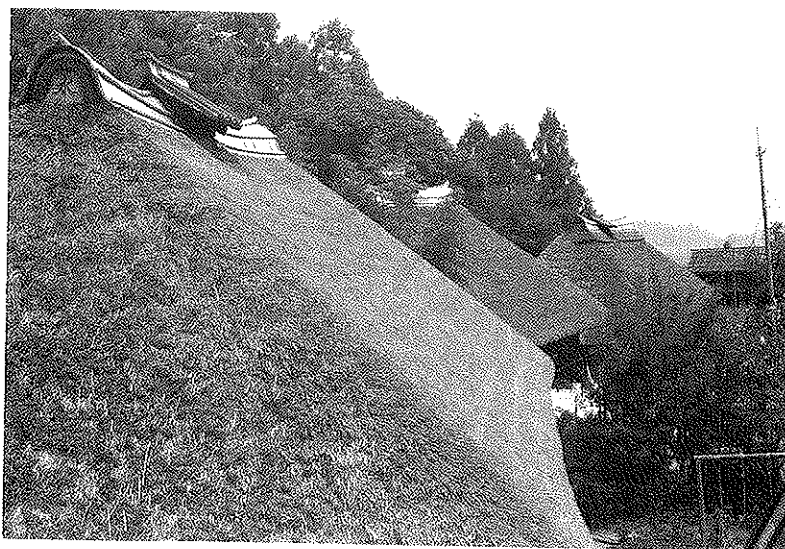
種蒔きの後、一カ月ぐらいたってから、鍬で畝の間の土を麦の根元のところへよせてやります。この作業をカタギルとかヒナタをキルなどといい、麦の保護と除草を兼ねた作業で、刈り取りまでに数回行います。また本市では冬になると畑一面に霜がたちはじめます。霜柱は麦も一緒に持ち上げてしまいますので、これを防止するために麦踏みをします。一冬で五回以上も寒い早朝から家中で麦踏みをしたところもあります。その後コンクリートを車状にした手押しのもぎミ機を用いるようになり、近年では耕うん機に多くのゴムタイヤをつけたもので行っています。

麦の刈り取りは五～六月ごろに行います。秋に米が黄金色に色づくのに例えて「麦秋」などとも呼ばれます。この頃はちょうど梅雨の季節にもあたるので、天候を気にしながらの作業となります。麦の刈り取りには主に草刈り鎌を用います。時には稲のようにノコギリガマを用いることもありますが、草刈り鎌の方が麦には適しています。ただ草刈り鎌はノコギリガマに比べて刃の切れ味が早く鈍るので、砥石を持ってきて、刃を研ぎながら刈り取りを行いました。刈り取った麦はその場に干して（直接地面に）おきますが、雨天が

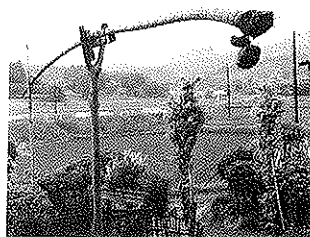
続くと麦が発芽してしまったりなかなか乾かなかったりするので、刈り取りの時期は慎重に選びます。もし雨天が続くような時は麦を裏返したりしましたが、やはりお天気次第のところが大きかったようです。またハデガケも用いたりしました。現在では稲刈り同様動力の稲刈り機やコンバインを用いています。

### (3) 脱穀・調整まで

十分に乾燥した麦は、藁でまるって（結んで）束にしてカナゴキ、後には動力脱穀機などで脱穀します。脱穀された麦は庭に敷いた筵に干しておき天日で乾燥させます。乾燥した後クルリボウで麦打ちを行います。麦打ちは麦の粒を穂から落とすのと、麦に付いているノゲを取るために行います。天気の良い暑い日に、繰り返し繰り返しクルリボウをたたくのと同時に、ノゲが舞いそれが肌を刺激してたまらないかゆみも伴うので、相当の重労働になりました。家だけの労働力で足りないようなときには他の人手を頼むことも多かったようです。麦打ちを済ませた麦は箕や唐箕を用いて選別をし、良い粉は種粉入れや俵などに入れて保存しておきます。選別にもれた質の劣る粉に関しては、堆肥や飼料などにも用いました。



農家の屋並（昭和 5 3 年）



つるべ井戸



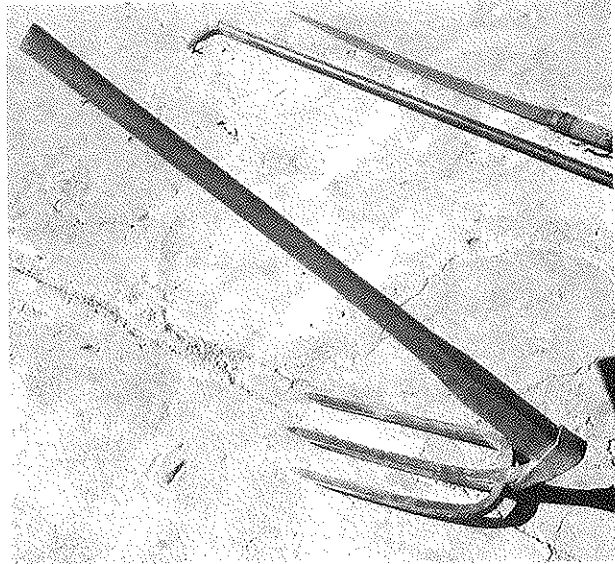
### 3 農具の解説

#### 〈鍬類〉

鍬は農作業における最も基本的な農具です。鍬は用途によって地面を引いて使うものと、地面に打ちつけて使うものに分けられますが、機械化全盛の現在でも重宝がられる農具の代表です。

#### (1) ビッチュウグワ（備中鍬）

ビッチュウグワは打ちつける打ち鍬の一種です。先が三本に分かれた鉄の部分をも木の柄にすげたもので、主に土地を起こすときに用いられます。



ビッチュウグワ

#### (2) マンノウ（万能）

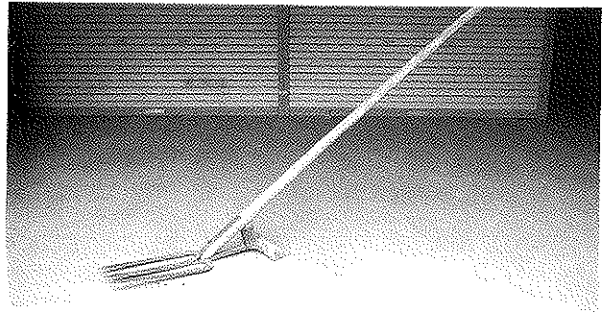
マンノウは鍬の一種で、地面に打ちつけて使う打ち鍬に属します。田を起こしたり田うないの時に主に用いられます。マンノウ自体には種類が多く、一番一般的な三本マンノウは三本に分かれた爪の部分が土も持ち上げられるようなカーブをしており、打つみでなく土をすくうこともできるようになっています。また先が四本に分かれた四本マンノウは爪の部分が尖っており、打ち鍬に適しています。他には爪の部分が細くなっている肥出しマンノウなどがあります。



マンノウ

### (3) エグワ（柄鍬）

畑の土起こしに用いる農具で、フミグワ（踏み鍬）とも言われます。風呂という板状の木の先に刃が付いており、刃の反対側に長い柄に足を掛ける部分（足掛け）があります。この足掛けに片足を掛けて、刃の部分に土を差し、エグワ自体を左右どちらかに反転し、後退しながら土を起こしていきます。ちょっとしたコツが要り慣れるまではなかなかうまく土を返すことができなかつたと言います。



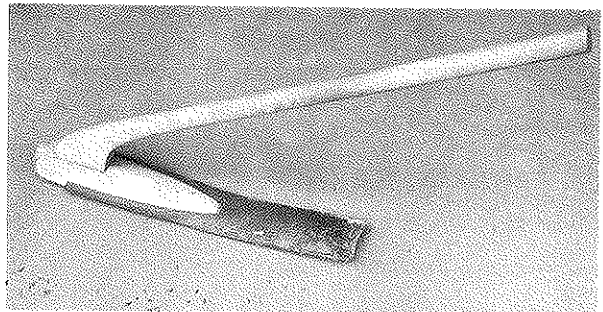
エグワ



エグワの使用

### (4) ヤシュウグワ（野州鍬）

鍬はその形態から、金鍬と風呂鍬に分けられます。金鍬は刃を直接柄につけたもので、風呂鍬は柄に付いている木製の台（フロ）の先に刃をはめ込んだもので、ヤシュウグワは風呂鍬の一種になります。ヤシュウグワの特徴はやわらかい土の場合に、一度に多くの部分をうなうことができる点にあります。また柄は真っ直ぐではなく、作業をしやすいうように若干手前に湾曲しています。



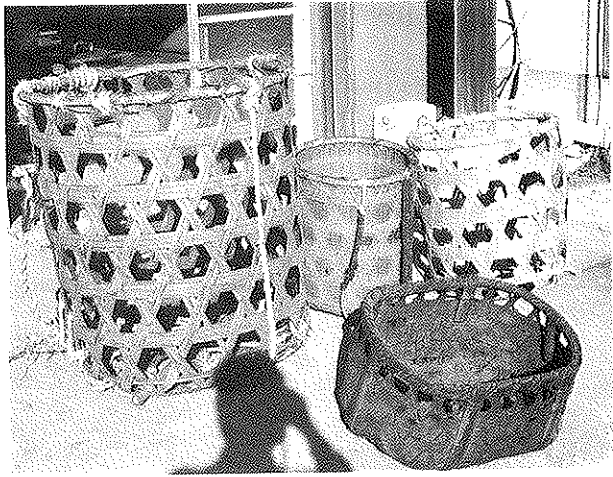
ヤシュウグワ



ヤシュウグワの使用

## 〈籠〉

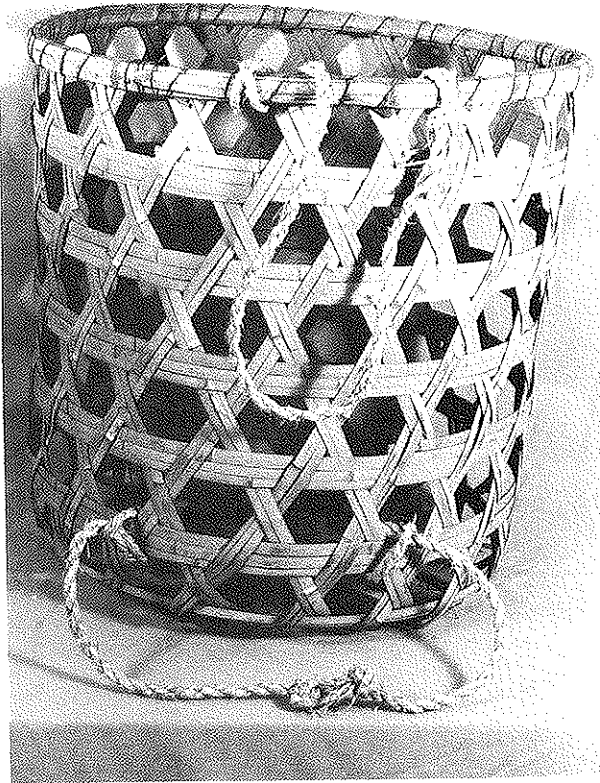
籠とは、竹（真竹）を中心にヤナギ、トウ（藤）などの材料で編んで、運搬用具や家庭用具、容器などに利用したものです。籠はその大きさと編み方により、様々な種類に分けられます。草刈り籠をはじめ、養蚕用・茶摘用などの仕事用の籠から、家庭用のざる、魚籠、虫籠など実に多くの種類があります。



### (5) オオガンゴ（大籠）

オオガンゴは竹を割って細くしたものを編んでつくる籠の一種で、特に大きなものをこう呼びました。普通の籠に比べて竹が太く厚みがあり、編み目も大きくできています。さらった木の葉を詰め込んだり、葉もの野菜（キャベツなど）を入れたりするのに、現在でも用いられています。これらの籠は器用な人は冬場の手仕事として作ったりもしましたが、多くは籠屋から購入しました。

上左からオオカンゴ、ショイカゴ、クサカリカゴ、  
下ヨコダカゴ



### (6) ナエトリカゴ（苗取り籠）

苗取り籠も多くある籠の一種です。草刈り籠が深くできているのに対して、この籠はざるのように高さが低くて、籠の縁から長い取っ手が出ていて、ここに

オオガンゴ

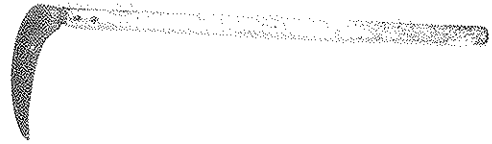
天秤棒を通して、肩に担いで苗代からとってきた苗を田圃まで運びました。苗に含まれた水が適度にきれないと重いために、編み目は苗が落ちない程度に大きめに作られています。

## 〈鎌〉

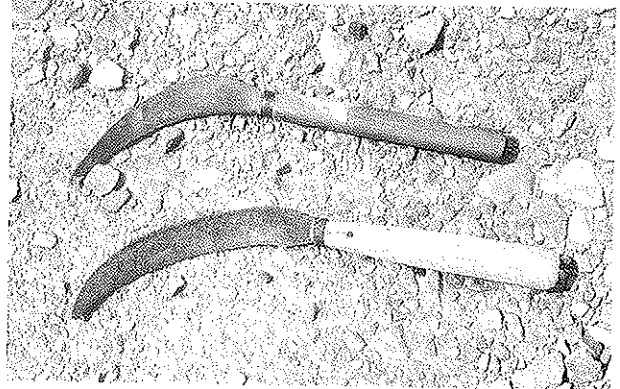
鎌はその刃の形によって、刃鎌と鋸鎌に分けることができます。

### (7) ハガマ (刃鎌)

刃鎌は、刃の大きさや刃の厚さによっていくつかの種類があります。草刈りに用いた鎌は、刃の長さが三十cmもあるような大きなものが多く使われました。切れ味は良いのですが、頻りに研がなければならない煩雑さもあります。



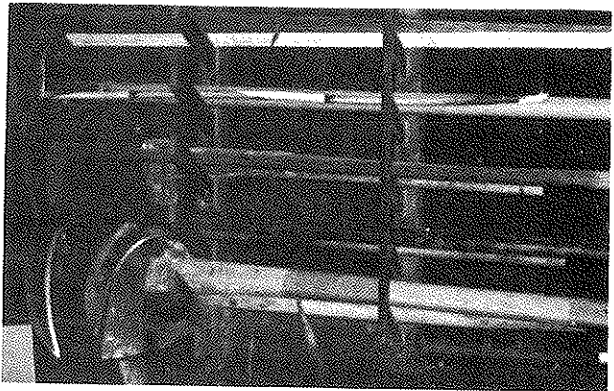
ハガマ



### (8) ノコギリガマ (鋸鎌)

鎌の一種で、刃の部分が鋸の刃のようにギザギザしているものです。草刈り鎌のように素晴らしい切れ味という訳にはいきませんが、稲の茎のような固いものを切る場合などには、刃を茎に当てて滑らせるようにすれば（少々力は要りますが）実に良く切れてくれます。また草刈り鎌のようにすぐ刃が鈍ってしまうこともなく、連続して長く使用できる利点もあります。

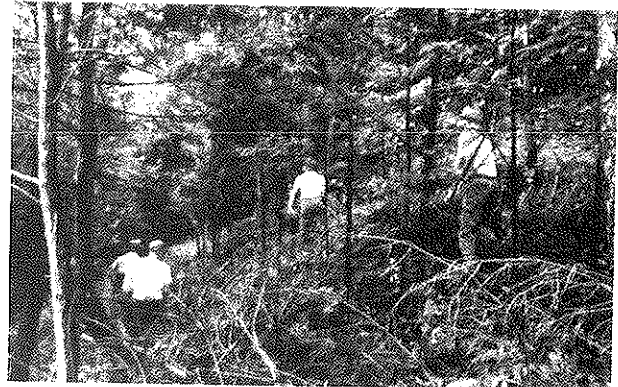
ノコギリガマ



オオガマ

### (9) オオガマ (大鎌)

ハガマの一種で大型の物は6尺に及ぶ柄に1尺以上の刃も取り付けられています。用途は、山や荒地に生い繁る背の高い雑草や細い樹木の刈り払い用で、両手で柄を握り振り回すようにして使用します。



オオガマの使用

## ＜桶類＞

スギやヒノキなどの柔らかい木で作られた容器で、容器の上部の部分を覆う蓋の有無によって樽と区別することができます。オケやタルはその用途によって様々な形や大きさのものがあり、農具としてのみでなく日常の生活で用いたり、祭の重要な役割をするものもあります。

### (10) コエオケ（肥桶）

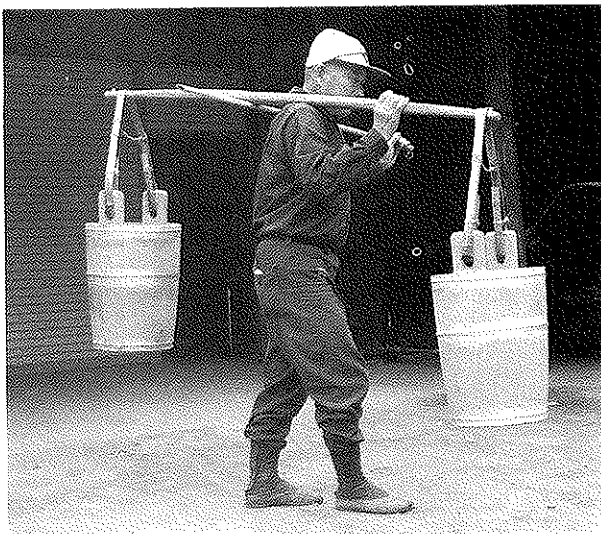
昔は重要な肥料の一つとして人の糞尿も用いました。この糞尿を入れて運ぶ道具がコエオケ（タガラ・ダツオケ）です。大きさは大体三種類に分けられ、普通約45ℓ、大きいもので約50ℓ、小さいもので約36ℓでした。いずれもテンビン棒の両端に下げて、肩に担いでバランスを保ちながら歩きました。重要な肥料である糞尿を入れる容器だけに大変大切にもされました。

### (11) テンビンボウ（天秤棒）

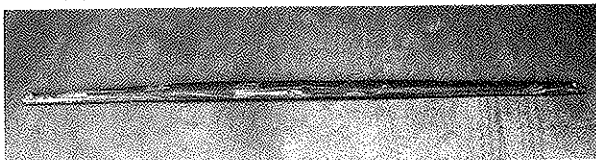
荷物の運搬に用いる棒で、かたい木を棒にして用います。棒の両端に荷物を掛けてバランスをとりながら人力で運びます。両端にコエオケを付けて糞尿を運んだり、モッコを付けて上を運んだりもします。また行商の人達が商品を下げて来る時にもよく使われました。棒の両端には荷物が落ちないように小さな突起が付いています。



タル



コエオケ



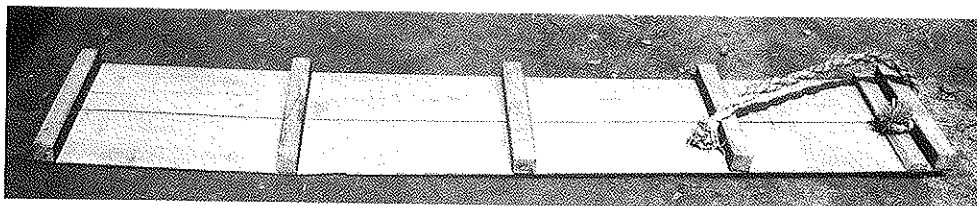
テンビンボウ



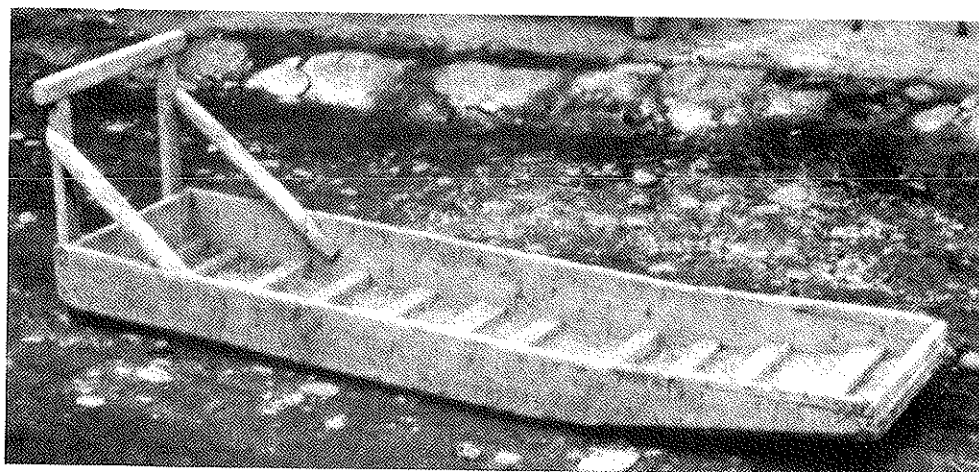
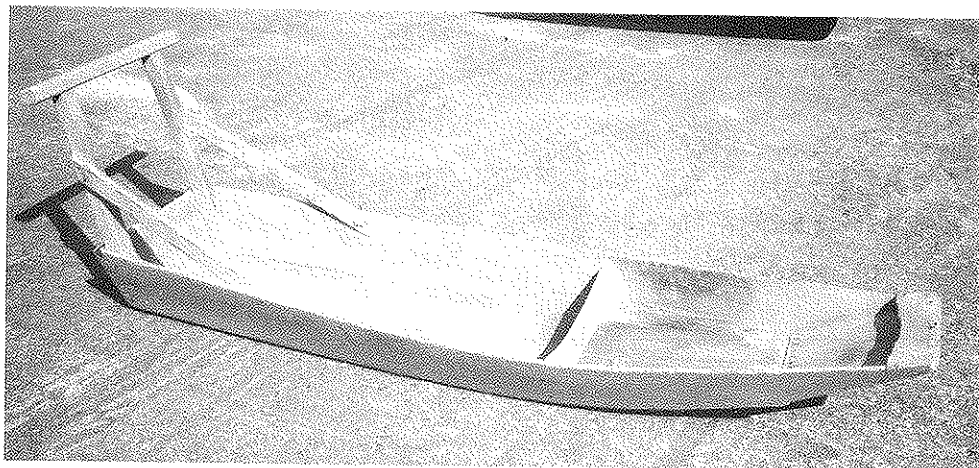
(12) ナエヒキイタ（苗引き板）・ナエヒキフネ（苗引き船）

苗引き板は田植えの時に、水の上で苗を運ぶために使われる農具です。板の上に苗を乗せてすべらせながら田植えを行いました。

苗引き船は、苗引き板と用途は全く同じです。形が板と船の形の違いがあり、船の方がより安定感があります。なお、苗引き板や船は、稲刈りの時になっても水が引かないような湿田（ドブッタ・ヤジッタなどという）の稲刈りに刈り取った稲が濡れないようにこれらの上に乗せて使うこともあります。



ナエヒキイタ



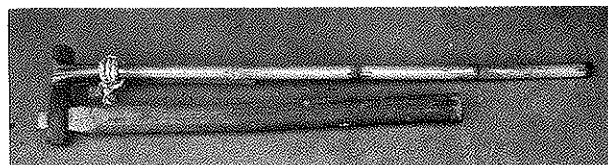
ナエヒキフネ



### (13) クルリボウ (くるり棒)

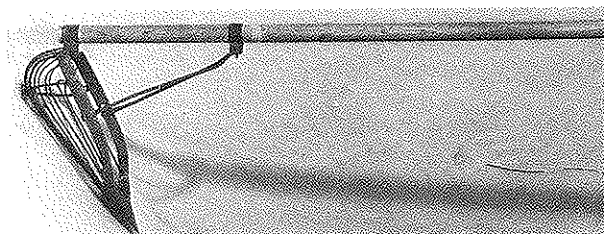
クルリボウは割った竹をまとめたものや杉などの棒を回転させて、穀物を脱穀するときに用いるものです。クルリボウのほかにはホウチボウ (穂打ち棒) やボウジボウ (ホウチボウがなまったもの)、カラサオなど様々な名称で呼ばれています。稲の場合は、センバコキや足踏み脱穀機で脱穀した後、まだ穂に籾が付いているときに最後の脱穀として用います。麦の場合も同様ですが、麦にはノゲを取る目的にも用いました。

この作業は、ボウウチやホウチなどと呼ばれますが、庭に敷いた籾いひの上で、または、きれいにしてある庭に直接稲や麦、豆類を置いて直接うちつけます。棒の部分回転させるために、慣れないと自分の体を打ってしまうことがよくあったそうです。また麦の場合は夏の炎天下での作業となるために、暑さと麦のノゲのかゆさが加わって相当つらい作業でした。そのために、唄をうたいながら作業をしたこともあるそうです。回転部分は大豆や小豆などの豆の時には棒を、稲や麦の時には割り竹を主に用いました。



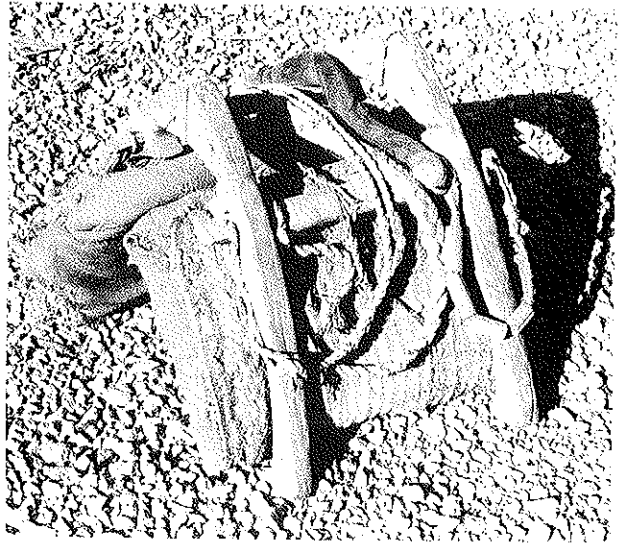
### (14) ツチカケ (土掛け)

長い棒の先に、主に鉄製のザルのようなものが付いている農具で、このザルの部分で土をすくって種の上などにかける時に用いました。



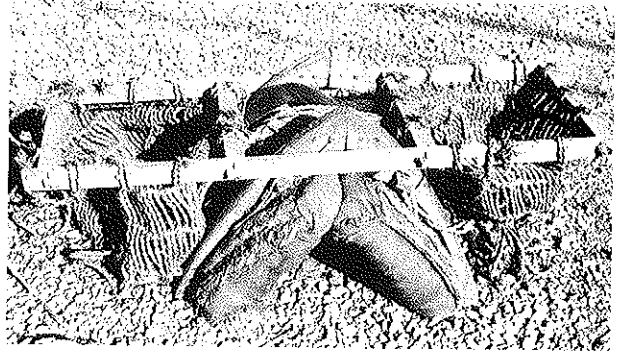
(15) ニグラ (荷鞍)

馬などの家畜の背に乗せて、物を運ぶ運搬用や、犁やマンガを引いたりする時に用いる農耕用の鞍です。ニグラとは厳密に言えば物の運搬用の鞍のみを指しますが、農耕用の鞍と混同して名称として使っている例が多いようです。農耕用の引き鞍は、荷鞍に比べるとより簡単で、首のところにつけた木製のハモとハモに付けてマンガを引くための縄などを付属品として用います。



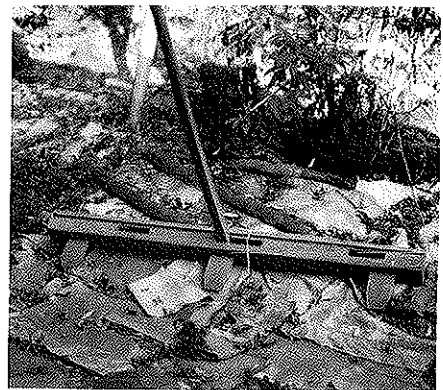
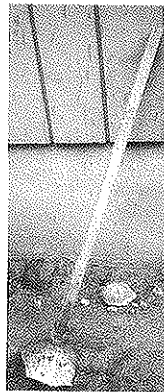
(16) ビク (魚籠)

ビクとは一般に魚を入れるための容器のことを指します。ここで言うビクとは、藁などの材料を荒い目に編み袋状にしたものです。鞍の両側にくくりつけて、中に肥料を入れ底に付いている紐を調整しながら、田や畑に肥料などを撒く時に使ったりします。



(17) ウネタテ (畝立て) ・ウネヒキ (畝引き)

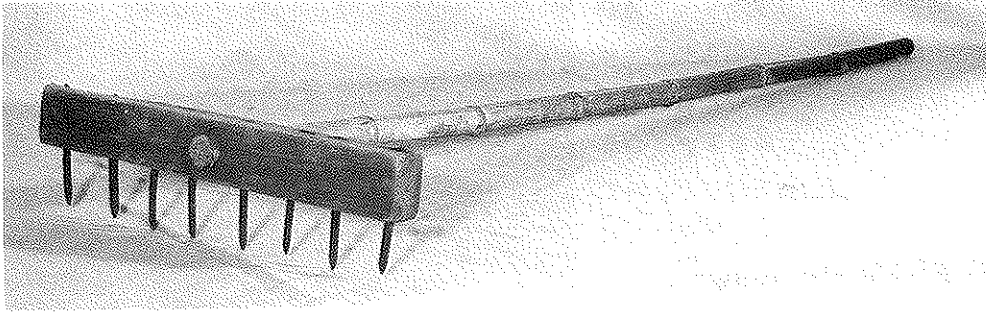
長い柄の先に三角形を半分くらい少し折り曲げたような金属製の爪が一つ付いているものをウネウネタテ、柄の先にナラシボウのように横に渡した木の板を付け、そこに複数の爪 (3本が多い) を付けたものをウネヒキと言います。いずれも、人が柄の先を持って後ろにさがりながら、畝を作っていくためのものです。



ウネウネタテ      ウネヒキ

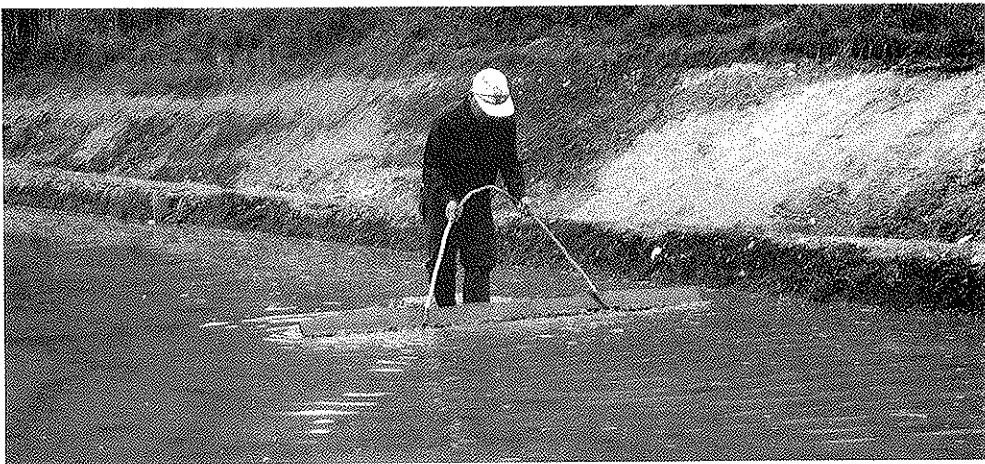
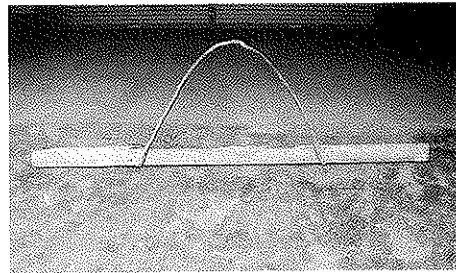
(18) ナラシボウ (均し棒)

ナラシボウも自分で作ることの多かった農具の一つです。水を張った田をゴミツキでだいたいならした後、さらに田植えをしやすくように平らにします。この他にも収穫して脱粒した米や麦、豆類を乾かすときに、筵や直接地面に置かれた米や麦、豆類を広げたり裏返ししたりするときにも活躍する農具です。



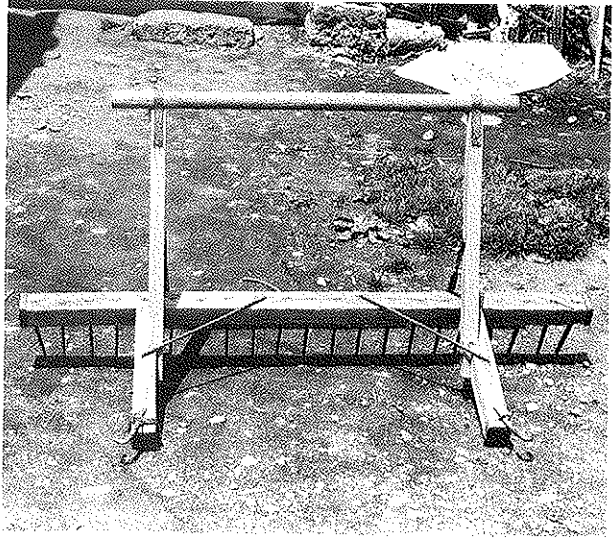
(19) ゴミツキ (ごみ突き)

農具にはほとんど自分で作ってしまうものと、お金を出して手に入れるものとの二種類に分けられますが、このゴミツキは自分で作る農具の代表です。幅の狭い木の板や木の棒を組んで作るもので、水を張った田の中に残るゴミや昨年の稲の株を上の中に押し込むようにして使います。両手で下にゴミツキを押し下げながら後退していくようにして、田をきれいにします。



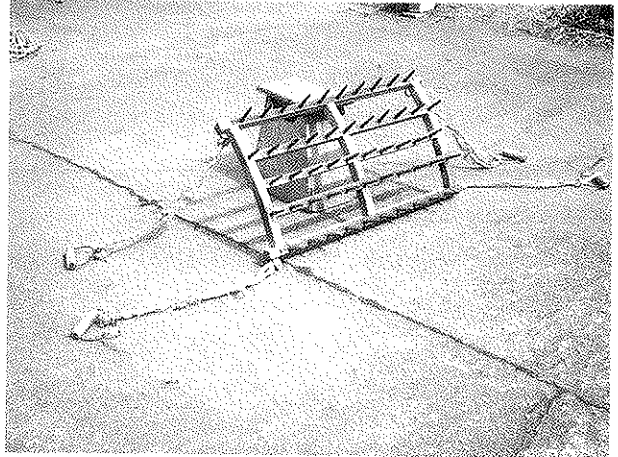
(20) マンガ (馬鍬)

マンガはマグワやマンガンなどとも呼ばれており、主に田植え前に行われる代かきに用いられる農具です。馬や牛に引かせて、一人がハナドリとして馬の手綱を引き、もう一人がマンガ自体を押さえる役目をします。堅い木で作った取っ手の下の部分に、金属の歯を付けたものです。歯の数やその形に様々なものがあり、土の固さや、田か畑かなどの違いにより使い分けたりしました。



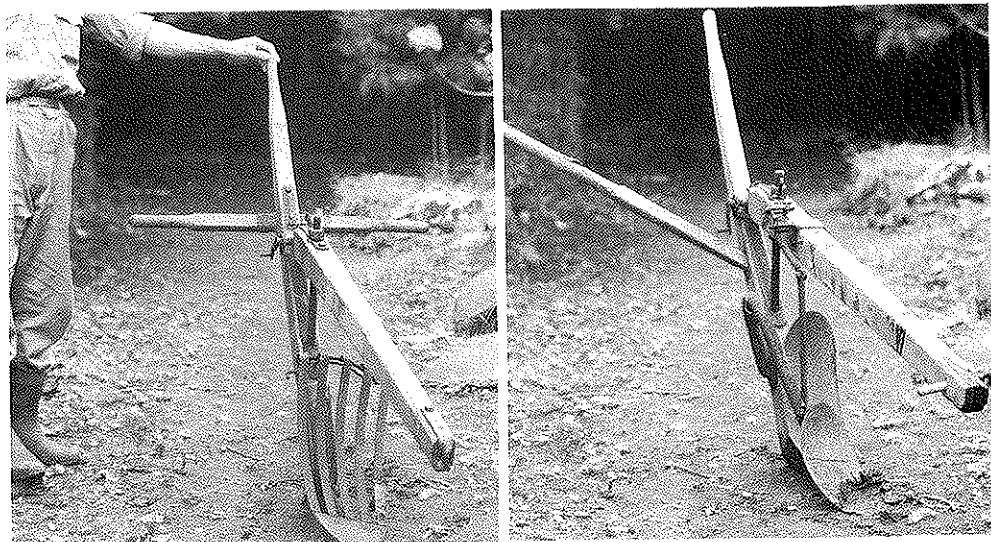
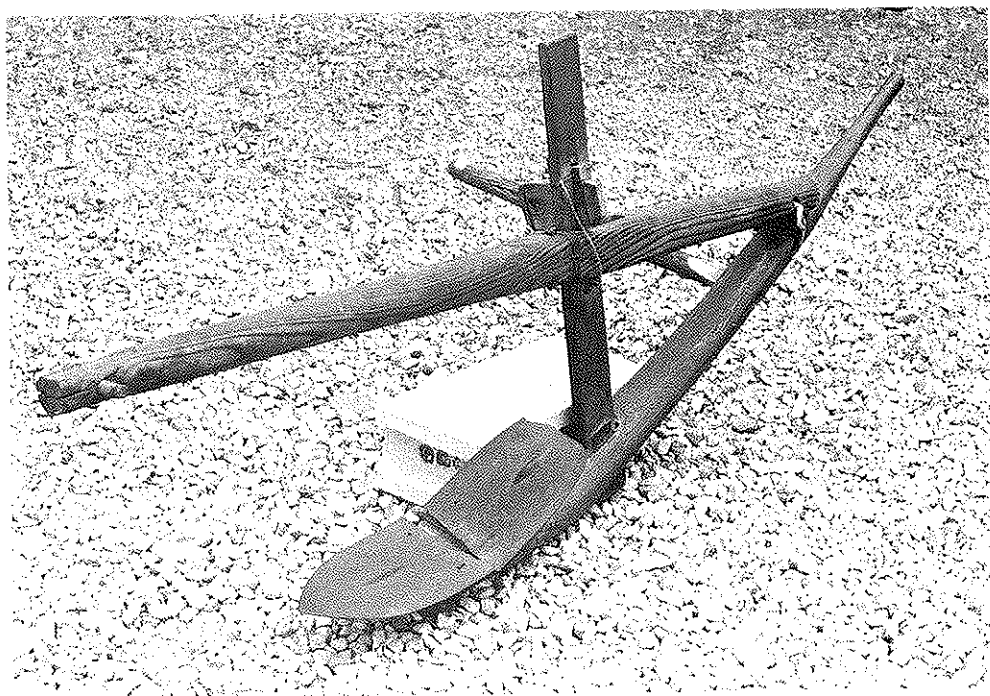
(21) フリマンガ (振馬鍬)

マンガやクルマンガで土を起こした後、さらに土を細かくするための農具です。四角い木の枠の中に鉄の歯が何列も出ており、木の枠の両側にそれぞれ紐が付いています。二人が向かい合い、紐を持って左右にフリマンガを振り、歯の部分を上表面にかすらせるようにして土を細かく砕いていきます。非常に力のいる重労働で、二人の息を合わせなければならない大変な作業でした。



(22) オオグワ（馬耕犁）

オオグワはオオガとも言われますが、鍬ではなく犁の一種です。（鋤は人力で土をおこすもので、犁は畜力で土をおこすものです）田や畑をおこす時に主に用いられるもので、馬や牛の畜力を使いましたが、ほとんどが馬にひかせました。牛の場合は湿田で主に使われたようです。その理由は牛のひづめは左右に開くために、馬に比べて足がもぐり込みにくいということからだそうです。

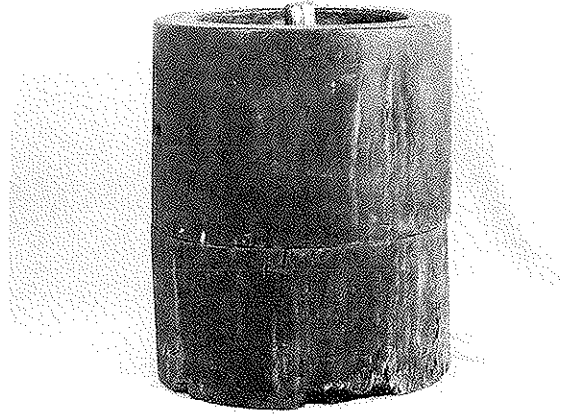


## ＜<sup>すりうす</sup>摺臼＞

摺臼は、脱穀した稲の粃の皮を取って玄米にするための道具です。一般には木摺臼と土摺臼が使用されました。

### (23) キズルス（木摺臼）

粃の皮を取って玄米にするための道具です。丸太切りにした材木の摺り合わせの部分に刻み目を入れて、上の部分を往復回転させて用いるものです。ウス（臼）やカラウス（唐臼）に比べれば能率は良くはなりませんが、一日当たりどんなに頑張っても数俵程度しか玄米にできなかったといわれます。またきざみ目が減ったときには刻み直す必要があり、これも結構大変な作業となりました。



### (24) ドズルス（土摺臼）

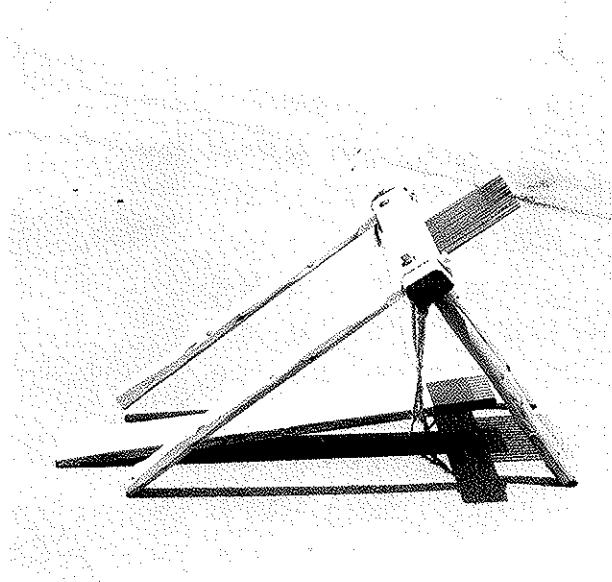
キズルスと同様に粃を玄米にする道具です。このドズルスは竹で編んだ籠の中に粘土を入れて、ニガリで固めたもので、そこに櫛などの固い木を埋め込んで歯としたものです。キズルスと違って、歯が減った場合はこの部分のみを交換すれば良くなりました。しかしドズルスを回転させるには大人で2～3人がかりでなければならず、一日の作業量も5俵にすぎなかったといわれます。





(25) センバコキ (千歯抜き)

センバコキは稲刈りをした稲の穂から籾を取るための農具です。金属製の刃を垂直に並べたもので、刃の間隔を利用して籾を抜き落とします。しかし、穂ごと取れてしまうものもかなりあるので、後でクルリボウで叩く必要があります。センバコキの名前の由来は、それまでのコキバシに比べれば千把<sup>せんば</sup>抜ける程能率が良いから付けられたという話と、歯がたくさん並んでいるところから付けられたという話もあります。



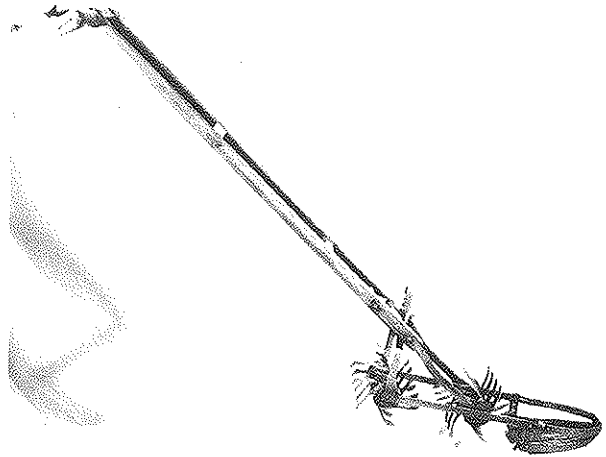
(26) アシブミダッコクキ (足踏み脱穀機)

センバコキはそれまでのコキバシ (抜き箒) に比べて、能率が良いことから名付けられましたが、このセンバコキをさらに能率良くしたのがこの足踏み脱穀機です。円筒形の胴の部分全体に小さな逆Uの字状の鉄線を多数付けたもので、足で踏むペダルで円筒を回転させ、籾を落とすものです。回転させる時の音からガーコンなどと一般には呼ばれていました。なお、一部には足踏み式ではなく、手回し式のものも使われました。



## ②7 ジョソウキ (除草機)

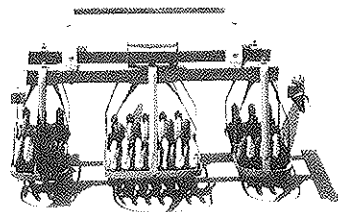
田植えを終えた後、次に待っている大変な仕事が除草です。暑い日に直射日光にさらされながら、足を水につけ、腰をかかめて行う作業は想像以上の重労働でした。この除草の労力を少しでも軽減するために様々な工夫が試みられてきました。熊手の小さなもので草をかきとるガンツメ（雁爪）もその一つで、指先や爪が割れるのを防いでくれます。さらに腰をかかめずに除草ができるようにと考えられたのが除草機です。下に付いている放射状の爪を回転させることによって、草を抜く仕掛けになっています。この除草機は人力で前に押すことで爪を回転させるために相当の力が必要でしたが、手で抜いていくのと比べれば、相当作業が楽になりました。この除草機は段々と改良されていき、最初は一条（一列）だけだったものが二条（二列）同時にできるようになったり、牛馬の畜力で除草機を引かせるなどと少しずつ変化していきました。なお、現在ではほとんどが除草剤を散布することによって、草が生えるのを防いでいます。



一条用



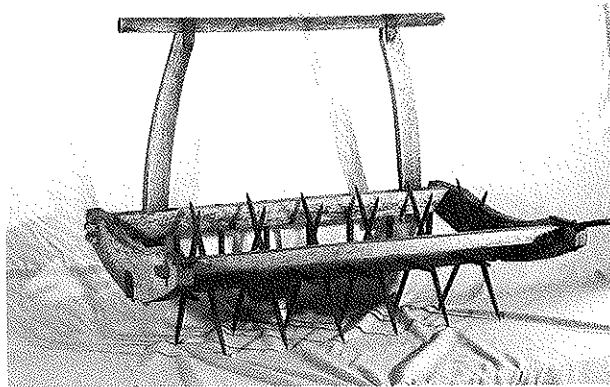
二条用



畜力用

(28) クルマンガン (車馬鋤)

マンガ (馬鋤) の一種で、畑の土を効果的に細かくするようになっています。一般のマンガとは、刃の部分が車状になっている点で異なります。畑では水田の耕起に比べて抵抗が少ないために、車状の刃でも使うことができます。



(29) モッコ (畚)

縄を網状にして四隅に縄をつけたもので、木の棒などに吊るして石や土などの重いものを運ぶ時に用います。一本の木の棒の先にモッコを付けて一人で担ぐ方法と、二本の棒の中心にモッコをぶら下げて二人で担ぐ方法がありますが、二人担ぎの方がより重いものを担ぐことができます。肥料や芋類を運ぶ時には荒縄で網状にしたものを、二本の竹に吊るしてタンカ (担架) の形にしたナワモッコが使われました。



タケモッコ

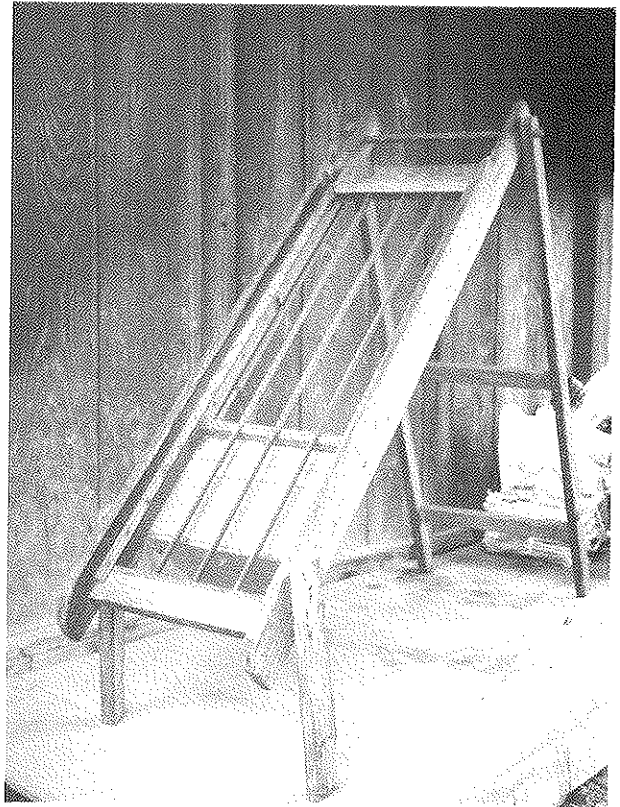
(30) クロナデ (畦なで)

クロオシとも言います。水田の場合、水漏れがあっては稲の成長に支障が出るので、畦はできるだけしっかりと作りました。このクロナデは板を逆凹状にして棒を付けたもので、畦作りの仕上げに上から押さえるように用いたものです。



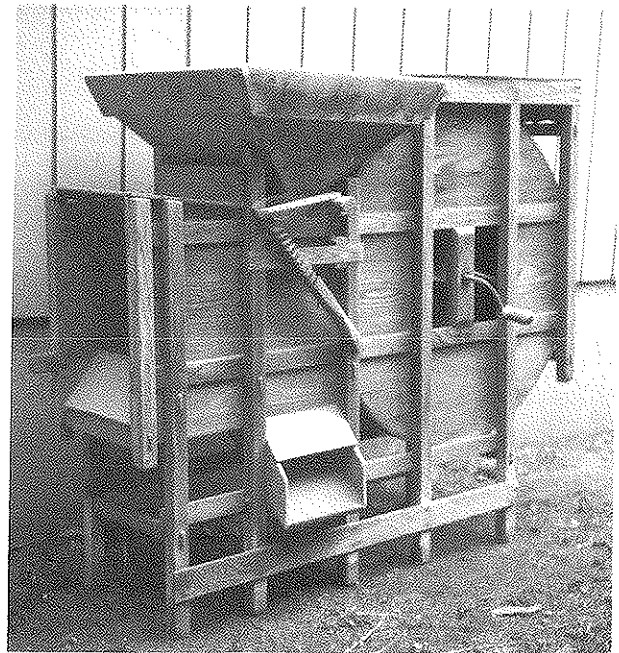
### (31) センゴク (千石)

米と粃を選り分ける農具で、多くの粃を簡単に選別できることから、千石の粃さえ選別できるとのことから付けられた名前です。マンゴク（万石）とさえいわれます。上の漏斗状の部分に粃を入れると、傾斜している網目の部分を粃は転がり落ちていき、玄米が網の目から下に落ちて、粃は軽いので網の終わりまで転がっていく事を利用して選別するものです。唐箕と同様の選別の農具ですが、唐箕の方がハンドルの回し具合で選別の具合を調節できることから唐箕ほどこの千石は普及はしませんでした。



### (32) トウミ (唐箕)

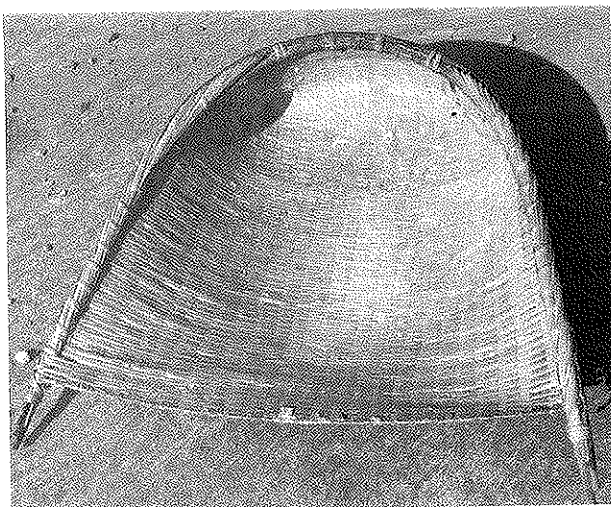
穀物や豆類の選別を風の力によって行う農具です。上の漏斗部に穀物を入れ、ハンドルを手で回して中の板の羽根を回転させ、その風力で清粒とゴミなどを選り分けます。清粒は重いので、手前の口の部分に落ち、くず粒やゴミは第二の口や第三の口まで飛ばされて選別されます。作業は一人がハンドルを回し、もう一人が漏斗部に穀物を流し込みます。風の強さは羽根を回転させる力で調整しますが、経験が必要としました。



### 33 ミ (箕)

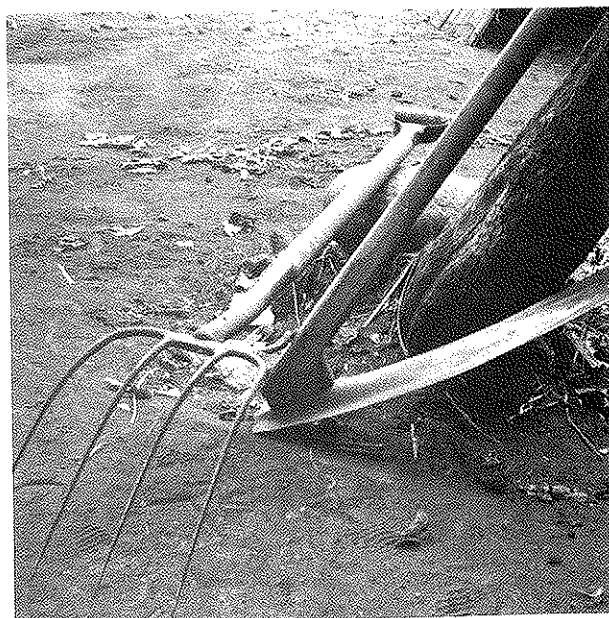
穀物や豆などのふるいわけや入れ物に詰める時に使う道具です。普通藤つる・竹を編んで作りますが、補強に柳や山桜の皮を入れることもあります。ふるいわけの時は中に入れた穀物などを空中で返すようにして、自然の風力でゴミなどを飛ばします。また入れ物に入れる場合には、口の部分がU字型に曲がるので、入口が小さい入れ物にも入れることができます。

また農具のみでなく、信仰にも多く用いられています。



### 34 フォーク

木製の柄の先に三～四本の細く尖った金属が出ているもので、藁や肥料を持ち出したり、動かしたりする時に使います。先が細長いために、藁などを突き刺すのに都合が良く、効率的に運ぶことができます。もともとは海外の酪農や牧畜で用いられていたものですが、特に戦後普及し現在では一般的な農具の一つとなりました。



左側がフォーク

### Ⅲ 農耕に伴う儀礼

現在の農業は、科学技術の進歩とともに日一日進歩しています。天気予報も時々刻々報じられ、昔では不作や凶作になったような年でも、現在ではそれなりの収量をあげることができるようになりました。しかし、ほんの少し前までは、農業を行うのは一種の賭みたいなところもありました。「今年は何の作物を作ったら良いのか」とか「今年の米は、早稲（わせ）と晩稲（おく）のどちらの方が収量が多いのだろうか」などと悩み、それを決定するひとつの手段として、占いに頼ることが多く行われてきました。また作物の成長の途中でも、無事な成長を祈ることを繰り返していったので、豊作であったときには、本当に喜びあったものです。一年を通して、私達は作物に関する様々な儀礼（祭り）を行ってきました。これらの儀礼の代表的なものを1月から12月まで見ていきたいと思います。

#### 1 冬から春にかけて

この時期には、麦作などの一部の作物を除いては、農作業はあまり行わない時です。しかし、この時期はこれから作物をつくるにあたる準備段階ともいえ、豊作を祈願するための様々な儀礼が行われます。一般にこのような儀礼を「予祝（よしゅく）儀礼」と言います。前もって豊作を祝う、という意味を含んでいるのです。

##### ◦ 1月6日（山入り）

宇都宮市では、ヤマといった場合、一般に平地林のことを指します。地形的な山と樹木を通して共通点を見出していたのです。山の樹木、特に落葉広葉樹の林は、恵みの点から言って室の山でした。春から夏にかけては山草、秋には茸や木の実などと共に、燃料としての枝から肥料としての落ち葉まで、数えあげられないくらいです。農業を行う際にもヤマの恵みは必要な条件でした。

山入りは、若木迎えなどともいわれますが、もともとは山仕事を生業とする人達の仕事始めや山で薪を切り始める日でしたが、前述しましたように、農業を生業とする人達にとっても重要な日であったのです。1月6日の早朝、家の主人が山に入り、適当な木の根元に家から持ってきた幣束（へいそく）、洗米（オサゴ）、餅（お重ね）、かつおぶし、御神酒、お頭付の魚、塩などを供えて山の恵みや農作物の豊作などを祈ります。所によっては、この場で持っていった鉈（なた）にお神酒をかけることもします。帰りには、木の根元で拾った落ち葉や、櫛などの生木を切って持ち帰り、お湯を沸かしてお茶を入れて、歳神様や大神宮様へ供えたり、お雑煮を作って食べたりもしました。

##### ◦ 1月7日（七草）

この日は、セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ（カブ）・スズシロ（大根）の7種類の草をきざんで粥や雑炊に入れて、神仏に供えると共に家族みんなで食べ

るものだと言われます。この七草粥を食べる理由を聞いてみると、「正月に御馳走ばかり食べていたので」とか「正月料理は野菜が少ないので、ちょうど7日ぐらいで野菜を食べると



ナナクサガユを食べる

良いからだ」などの話を聞くことができます。たしかに、正月も7日ごろになると正月料理にも飽きてくるので、この簡素な七草粥が大変においしく感じられるのも事実です。

しかし、1月7日は、1日の大正月と15日の小正月のちょうど中間の日にあたり、七草粥という一種の精進料理を食べることによって、さらに精進潔斎する（身を清める）とも考えられるのです。また、七草をさぎむ時には、「七草ナズナ、唐土（とうど）の鳥が日本の国へ渡らぬうちに、ストトン、ストトン」などという唱え言葉を言います。この中には、せっかく実った作物を鳥に食べられないようにという『鳥追い』と考えられる言葉も含まれていますので、正月の神様に一年の豊作をお願いする意味合いもあったようです。

#### ○1月11日（カラスヨバリー鳥呼ばり）

1月6日の山仕事の始めに対して、この日は畑仕事の始めになります。クワイレ（鍬入れ）やクワタチ（鍬たて）などとも言われます。この日は1月6日に行われた山入り同様、早朝から始まります。まだ日も出ないまっ暗い中、家の年男が鍬、米、魚（お頭付）、御神酒、餅、松の枝に付けた幣束などを持って田や畑に行きます。畑に半紙を敷き幣束を挿した後、持ってきた供物を並べ、鍬で畝を作り（畑が固く凍っている場合はまねごとだけ）、幣束に手を合わせた後「カラス、カラス、カラス」と三回大きな声で叫びます。場所によっては、供物が鳥によって早く食べられるとその年の作柄が良いとか、複数の供物を置いて、どれが



カラスヨバリ

一番早く食べられるか、とかどのような順番で食べられるのか、といったことをもとにして種籾を蒔く時期を決めることがかつて行われた（上欠町では細かく切った餅を三か所に置き、どの餅が早く食べられるかによって、早稲・中稲・晩稲を決めた）ようですが、最近ではほとんど行われません。また鍬で畝を作る時に、3つの畝を作り、それぞれ七回・五回・三回鍬を入れる（入れるまねをする）所もあります。また、畝

を作る時に

「ヒトクワ サクリコ

フタクワ サクリコ

ミクワメノ クワサキデ

キンギンチャガマヲ ホリダシテ」

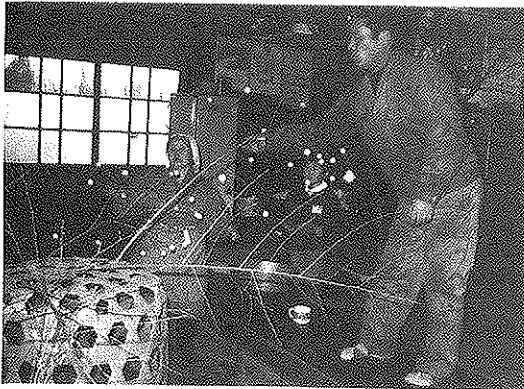
一鍬 サクリコ (鍬を入れる音)  
二鍬 サクリコ  
三鍬目の 鍬先で  
金銀茶釜を 掘り出して

と、歌を歌いながら鍬を振る所もあります。いずれにしましても、このカラすヨバリは、田・畑の豊作を安全を祈る、重要な予祝行事の一つです。

○1月14日(コショウガツ=小正月)

1月1日の正月(大正月)に対して、1月14日から16日までは小正月と呼ばれさまざまな行事が行われます。

まずこの日には、ミズキ(水木)の枝を切ってきたものの先に、米を粉にしたものに色を



マユダマダンゴ

付け丸めて蒸したものを刺したマユダマダンゴを作ります。このマユダマダンゴは、字の通り<sup>よいだま</sup>蘭玉を表しているとも言われ、養蚕が盛んだった頃「良い蘭が取れますように」とか、「田畑の作物が豊作でありますように」という理由で作られるとも言われています。このマユダマダンゴは夜行われるドンド焼きであぶって食べると一年間風邪をひかないといわれます。

またこの日には、主にヌルデ(白膠木、一般にはノデボウとかノーデンボウという)の木を削って「削り花」にします。このヌルデはヤマイリの時に取ってきたものを使う所が多いようです。また削り花のほかに、ヌルデの皮を半分むいたアワボウ(アーボウとも言う。栗棒のこと)と、皮をむかないヒエボウ(ヒーボウとも言う。稗棒のこと)を並べて堆肥の上や、取り去った門松の跡に置いておきます。かつての畑作物の代表であった粟や稗の模型を飾ることによって一年間の豊作を祈る、予祝行事の一つなのです。

さて、15日になりますと、アズキガユ(小豆粥)を作って食べていました。アズキガユは15日の早朝に作り始めますが、この時にアワボウ・ヒエボウと同様にヤマイリの時に山から取ってきたヌルデの木を削ってカユバン(粥箸、モチバン=餅箸ともいう)を作ります。この箸は適当な長さに切った枝の半分だけ皮をむいて、両端を細く削り中央を太いま残すので、ハラミバン(中央が太いところから、ハラム=妊娠するにかけてつけられた名称です)とも言われます。これを束にして紐で縛り、そのまま縦に粥の中に半分ぐらい差し込みます。取り出した箸をまず歳神様に供えた後、家の中の神棚や門松の跡、囲炉裏や竈の神様など



あらゆる神様にこの箸を供えて、一年の豊作を祈ります。なお、この箸をとっておいて、夏に雷が来た時に庭に箸を投げると雷が落ちないとか、ハラミバシの言葉の通り、子供が欲しい人にこの箸をあげるとすぐ子供が出来るとかわれます。またアズキガユを煮た汁を家の回りに撒いておくと、蛇が中に入らないという俗信もあります。アズキガユを食べる時には、どんなに熱くてもカユを吹いてはいけないと言われます。これはアズキガユを吹くとその年



ハラミバシをアズキガユにつける

は風が強くなり、稲がよくできなくなるからだと言うことです。

16日はダイサイニチ（大齋日）と言われ、「カギツルシ（自在鉤）も休ませろ」と言われ、仕事を休んだ日です。しかしこの日はマヤゲダシ（厩肥出し）とも言われ、馬や牛の小屋のマヤゲを出して掃除をしたり、馬や牛を洗ったりしました。この日にマヤゲダシをすると、一年間馬や牛にけががないと言われたからです。農耕に重要な

役割を果たした馬や牛をねぎらう日でもあったわけです。

#### ○ 2月3日ごろ（セツブナー節分）

立春の前日を節分と言います。立春はまさに冬から春へ移り変わる節目の日で、現在でも一年の中の代表的な行事となっています。この日は一升俵に入れた煎った大豆を「福は内、福は内、鬼は外、鬼は外」の掛け声とともに、年男が家の中の神々や便所、納戸などにまいて歩き、最後には家の戸口から外に投げて戸を閉めます。この豆まきは大豆の持っている呪力でもって、家の内外にいる災いを追い払い、福を呼び込もうとするものです。さて、この節分にまいた大豆で、一年間の農業の吉凶を占う豆占（まめうら）をするところがあります。市内では篠井町からの報告ですが、大豆をまいた後すぐに12個の大豆を囲炉裏の中の火の



イロリに大豆を並べる

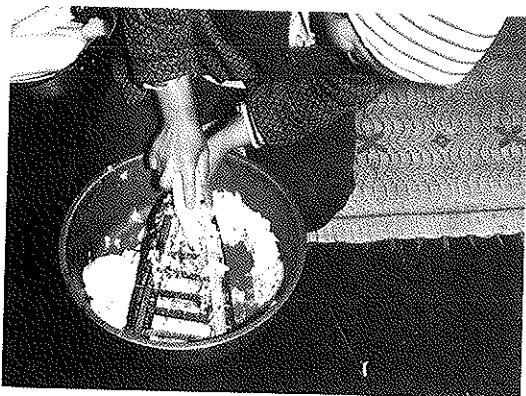
回りに丸く並べて、大豆の焦げ具合を見ます。この12個の大豆は1月から12月までを表しており、早く焦げたものや特に焦げたものに当てはまる月には、風が強く吹くと言われていました。市外の例では、節分に撒いた大豆を用いて、稲の作柄を決めたり、風以外の天候の占いに用いるものもあります。栃木県内では数少ない報告の習俗となっています。

◦ 2月10日（ジチンサマ―地鎮様）

2月10日はジチンサマやトオカンヤなどと呼ばれる日で、この日に稲の成長を司る田の神様が降りてくるといわれます。一年になぞらえた12個の丸餅を一升榊に入れて田の神様や大神宮様に供えたりします。また、空の臼を杵でつくると、その音で神様が降りてくるとも言われ、稲作にとってなくてはならない神様をお迎えする重要な日で、いよいよ稲作を始めるための心を整える日でもあったのです。

◦ 2月初午（シモツカレ）

2月の最初にあたる午の日を初午と称し、栃木県を中心に隣接する県でシモツカレやシミツカレなどと呼ばれる食べ物を作ります。シモツカレは、節分の大豆、シオビキ（鮭）の頭、酒粕、油揚げとオニオロシという木竹製の道具でおろした大根・人参などを良く煮たものです。



オニオロシで大根をおろす

初午の日にはこのシモツカレを藁苞（ワラツト）に包んで、稲荷社に供えて五穀豊穡や家内安全などを祈ります。稲荷様というのは字が示すように、稲と関係が深く稲の神様や作神様と考えられてきました。なお、稲荷神社は京都の伏見稲荷が本元とされ、この伏見稲荷に神様が降臨したのが2月の初午といわれているために、この日が稲荷社のおまつりの日となったのです。

◦ 3月15日（麦ごと）

農業に関係する一年の行事を見てみますと、稲作に係わる行事は非常に多いかわりに、畑作の行事は数が少ない傾向があります。この麦ごとは畑作の少ない行事の内の一つで、麦の豊作を祈ると同時に雹の害を防ぐための行事です。3月の始めにもらったお札を笹の付いた竹の先に付け、15日の朝早く作った草餅を藁のツッコに包んでその竹にくくりつけたものを畑に挿すものです。

## 2 春から夏にかけて

いよいよ農作業が始まり、本当に忙しくなる時期です。まだ予祝行事的な色彩は強いのですが、作業と密着した祭も始まってきます。

◦ 田植え終了後（サナブリ）

田植えは稲作にとって、前半部分の最大の行事です。田植えという非常に辛い重労働を終えた喜びと、稲のこれからの順調な成育の願いが合わさった形でサナブリという行事が行

われます。本市の場合、サナブリは大きく二つに分けることができます。一つは大サナブリといい、村や大字などの単位ごとに盛大にお祝いをするもので、もう一つは単にサナブリとか小サナブリというもので、各家ごとに行われるものです。所によっては大サナブリ、小サナブリだけではなく、現在の各自治会にあたる単位で行われた中サナブリまで行ったことがあるそうです。

大サナブリは、村又は大字全体の田植えが終了した時点で行われるもので、村の鎮守などに集まって盛大に飲み食いします。場所によっては、毎年日を決めて実施していた（7月2日の半夏生－はんげしょう－など）そうです。普通この日はコトビ（事日）として仕事全てを休みにしていたようです。一方、家ごとに行われるサナブリでは、田植えが終わったばかりの田の水口の苗を抜いて一束にし、きれいに洗った後一升桶に入れておきます。その上にコウセン（香煎－麦をひいて粉にしたもの）をふりかけ、オカマサマ（竈や台所に祀る神様で普通火を司るといわれる）に供えます。これはコウセンを稲の花に見立てて「このように米の花がたくさん咲き、豊作になりますように」というようなことを祈ります。田の神様を中心とする神仏にお願いする重要な予祝行事です。またこの時には、赤飯やボタモチなどと御馳走を作ってお祝いをしました。田植えに手伝いを頼んだ場合には、御馳走を食べてもらったり、赤飯やボタモチを家に届けたりもしました。

### 3 夏から秋にかけて



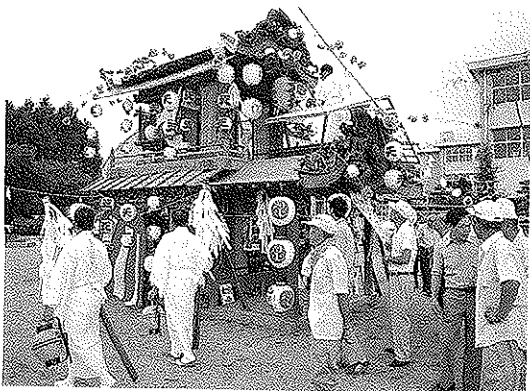
タウエ

暑い日差しを受けて順調に成育し、稲が実りを迎える時期です。適度な日照と降雨が必要な稲作ゆえに、天候にかかわるお祭が多いのもこの時期の特色の一つです。

○ 7月15日前後〔現在は月遅れで行う事が多い〕（オテンサイーお天祭）

オテンサイとは栃木県を中心にして分布している祭で、五穀豊穰や風雨調を祈願します。

オテンサイは春から夏にかけて行われ、場所によって実施される日がまちまちですが、本市の場合お盆の頃に集中して行われます。もともと市内に50以上のオテンサイが行われていましたが、現在では数年おきに10箇所弱しか実施されていません。ちなみに、市内の天棚



野尻・長坂のオテンサイ

の数は、一市町村単位では日本一の数になります。さて、オテンサイとは天棚という立派な彫刻を施した車の無い二階建ての屋台のようなものに、日天・月天（にってん・げってん）の掛軸をかけて、太陽・月を中心とする様々な神仏に豊作や村内安全などを祈願する祭で、村の人達はこの天棚の回りをまわって祈ります。太陽や月といった自然の力に頼る、素朴な豊作祈願なのです。

◦ 9月1日ごろ（風まつり）

立春から数えて210日ごろは、ちょうど台風がやって来る時期にあたります。ところがこの時期は稲の開花期から実りの時期にもあたり、大風による被害は稲に深刻な影響を及ぼします。そこでこのころをニヒャクトオカ（二百十日）といい、風・嵐が来ないように願うお



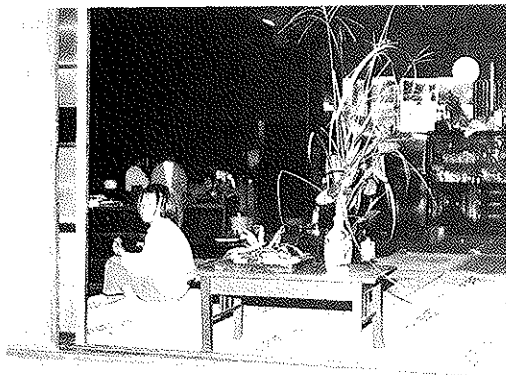
カザマツリのお日待

祭を一般に風まつりといいます。この日に新里町では獅子舞を演じますが、これは獅子の力で風を追い払う意味があります。また、長い竹の先に草刈り鎌を結びつけたものを、屋根に立て掛けた所もあります。これも鎌の鋭い刃で風を切るという意味から行われていたものです。さらにお囃子の演奏や屋台の引き回しといったものも行われたりもしました。

◦ 旧8月15日（十五夜）

私達の家はまだ電気が入る前には、夜は本当に暗いものでした。それだけに、満月の光りというものは大変にありがたいもので、一年の行事を通して見ると15日前後に様々な行事が集中しているのが分かります。特に、旧暦8月15日の満月を中秋の名月と呼んで、昔から多くの人々がこの月を愛でてきました。さて、この日に各家々では必ず満月が見える縁側などに台をこしらえて、ススキ、柿、栗、ケンチン汁や月見団子（15個）などを供えます。また夕食の後、子供たちが何人かのグループを作って近所の家の庭でボージボ（薬鉄砲）打ちをします。ボージボとは、芋がらを芯にして薬を束ねて縄で固く巻いたものです。これを

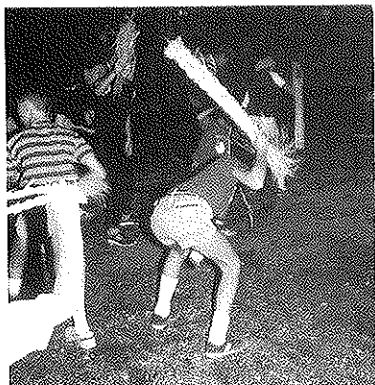
庭に何度も打ちつけるときに「大麦あたれ、小麦あたれ、三角畑の蕎麦あたれ」とか「十五夜の薬鉄砲、三角畑の蕎麦あたり、大豆も小豆もよくあたれ、大麦・小麦よくあたれ」など



の唱えごとを言います。頃合を見計らって家の人がおひねり（おかね）、菓子、果物などを子供たちに配ります。これは上を叩くことによって作物を荒らすモグラを叩くためとも、地の中の神様を呼び覚ますためとも言われています。ともかく、一種の豊作祈願であったことは間違いなさそうです。

#### 十五夜の添えもの

##### ○ 9月13日（十三夜）



ホージボ打ち

十三夜も十五夜と同様に月を愛でる日です。「十五夜の時に月見をした時は、十三夜の時も必ず月見をするものだ」など言われています。縁側に置く供物や、ホージボ打ちもほとんどが十五夜の時と同じですが、唱えことばの中の『十五夜』が『十三夜』に変わるぐらいです。

#### 4 秋から冬にかけて

稲の収穫が終わり、豊作への感謝のお祭りが中心となります。一年の中で一番喜びにあふれている時期で、村の中の神社のお祭りが11月頃に集中しているのはこのような理由によるためです。

##### ○ 10月10日（ジチンサマー地鎮様）

10月に入った頃になりますと、稲刈りも終了し農作業も一段落ついてきます。このジチンサマー（トオカンヤとかジガミサマーともいう一十月夜、地神様）は2月のジチンサマーに対応するもので、2月のジチンサマーが豊作祈願であるのに対して、10月のものは収穫祭や収穫の御礼といった色彩が強くなります。またこの日には、2月におりてきた田の神様がお帰りの日だとも言われます。2月同様餅を12個丸めて一升俵にいれてジチンサマーに供えますが、この餅をジチンモチ（地鎮餅）と呼ぶところもあります。またこの日に「蛙も天に上

がる日だ」とも言われます。蛙はちょうど2月頃に出てきて、10月頃にいなくなるので、蛙に乗って田の神様が去来するという信仰があったためです。

◦11月15日（アブラシメー油しめ、霜月十五日）

現在、11月15日というとすぐ「七五三」を思いつきます。もともとこの日はオビトキ（帯解き）とも言われ、七・五・三歳の子供たちの成長の祝いであったものが近年豪華化したものです。さて、アブラシメとは正に油を絞ったという意味の日で、この油を使いケンチン汁やてんぷらを作って食べたのです。また神仏にこれらの食べ物を供えました。またこの日に神社のお祭を行うところでは、甘酒祭と称して甘酒を大量に作り、参拝者に御馳走したりもしました。アブラシメも甘酒祭も田や畑の収穫物を使って神仏に対する感謝の心を表したものといえるでしょう。

◦12月8日（シワスヨウカー師走八日）

この日は2月8日のコトハジメ、コトヨウカ（事始め、事八日）に対応する日とされています。2月8日同様仕事は休みとされ、特に裁縫をしている人は針供養として豆腐に針を刺すことが良く知られています。また家の出入り口に柵の枝にニンニクや唐辛子を刺したものを置いて魔除けとすることも現在でも見かけることができます。さらに、12月8日の場合



ニンニクトウフを刺す

には、コトジマイとかシゴトジマイ（事仕舞い、仕事仕舞い）とあって、一年間の仕事納めといわれていたためにこの日に田の神様が帰っていくというところもあります。この日からはいよいよ新年に向かう準備のスタートの日でもあるわけです。



宇都宮の村落（昭和53年）

# IV 参 考 資 料

## 1 宇都宮の農事暦

月	米	麦	他の作物	山仕事
1		施肥(下肥) ↓		<ul style="list-style-type: none"> <li>木の葉さらい(堆肥)</li> <li>木</li> <li>木取り(燃料用)</li> <li>炭焼き ↓</li> </ul>
2		麦ふみ ↓		
3	くろふみ	土入れ	ジャガイモ播種	↓
4	打起(田うない) 苗代 荒くれ	打起(中耕)	ナス・サツマ・大豆 小豆・トウモロコシ サトイモ・ゴボウ ニンジン播種	
5	中代		サツマ移植 ↓	植付(杉、ひのき) ↓
6	上代 田植	収穫		
7	除草(田の草) 1番(田の草) 2番(田の草)			山の下刈(堆肥用) ↓
8	ヒエ取り		大根・カブ・ハクサイ 播種 小豆・ササゲ収穫 トウモロコシ } 収穫 インゲン } ↓	
9	ヒエ取り		大豆収穫 ↓	
10	刈取り	ビール麦 } 大麦 } 芽出し 小麦 } 播種	↓ サツマ収穫 サトイモ収穫	
11	収穫 脱穀		菜類の収穫 ゴボウ } 収穫 ニンジン } ↓ 大根収穫	カヤ刈り
12	整理 薬切り	麦ふみ	↓ ↓	木の葉さらい

第2次世界大戦前

## 2 協力者一覧

本調査におきましては、下記の方々に御協力をいただきました。記して感謝申し上げます。  
なお、記載の順番につきましては不同、敬称は略させていただきますので、御了承の程お願い申し上げます。

半田 定久 (大曾三)	藤田 勘一 (築瀬町)	田代 明男 (駒生町)
天谷 文夫 (駒生町)	天谷 松吉 (駒生町)	上沢 茂平 (駒生町)
稲葉 守政 (宝木町)	平出 英夫 (平出町)	大谷 正治 (板戸町)
北島 秀夫 (鑑山町)	増淵 卯三郎 (さるやま町)	永見 博邦 (さるやま町)
阿部 孝一 (飯田町)	松島 幸一 (飯田町)	松島 徹 (飯田町)
村山 浩一 (大谷町)	松島 清 (大谷町)	天谷 保一 (駒生町)
阿部 照夫 (下荒針町)	安生 善一 (下荒針町)	沢田 信伊 (下荒針町)
鈴木 宇喜 (下荒針町)	鈴木 恒治 (下荒針町)	鈴木 康雄 (下荒針町)
麦倉 俊夫 (下荒針町)	枝 和之 (田野町)	枝 忠弘 (田野町)
岡本 安一 (大網町)	手塚 孝 (大網町)	永岡 善四郎 (大網町)
池田 善次 (上金井町)	柿沼 威 (上金井町)	小曾戸 光 (上横倉町)
池田 勘一 (徳次郎町)	池田 憲雄 (徳次郎町)	池田 秀雄 (徳次郎町)
池田 豊作 (徳次郎町)	大島 藤一郎 (徳次郎町)	岡本 弘一 (徳次郎町)
杉山 幸夫 (徳次郎町)	福田 常松 (徳次郎町)	福村 正一 (徳次郎町)
阿久津 美重 (篠井町)	阿久津 ラク (篠井町)	田崎 キク (篠井町)
田崎 フクノ (篠井町)	田代 元仁 (上欠町)	篠崎 清治 (上御田町)
本多 金一郎 (下横田町)	渡辺 利種 (下横田町)	大塚 明 (東谷町)
粕谷 富一 (東谷町)	五月女 旭 (東谷町)	五月女 和弘 (東谷町)
福田 重男 (東谷町)	福田 昭二 (東谷町)	福田 房夫 (東谷町)
増淵 藤助 (東谷町)	百瀬 幸助 (東谷町)	篠原 勝 (茂原町)
杉山 政一 (御田長島町)		



## あ と が き

文化財シリーズ第11号として「宇都宮の農具」を、関係者の方々の御協力・御指導により発刊することができました。ここに厚く御礼申し上げます。

農具は私たちの生活に密着して受け継がれてきました。それだけ社会や文化の動きに敏感であり、技術の改良が急速になされるが故に、放棄または廃棄され忘れ去られてしまうものも数多くあります。しかしひとつひとつの農具が生まれてきた過程には、非常に多くの先人の智恵や技術の積み重ねがなされており、それらを明らかにし次代へとつないでいくのは、現在の私たちに課せられた一つの使命とも言えるのではないのでしょうか。

そのような意味で、本書が皆様方の目にとまり身近な農具を見直す契機になれば、編集に携わった者としてこれにまさる喜びはございません。

さて、本書は上記の意図を踏まえて編集したものですので、農具それぞれの説明は出来るだけ簡単にかつ分かりやすく書きました。またその農具を用いる状況を把握する一つの手立てとして、農業を一年という単位で通して見た場合、その中で『どの時期に農具が使われるのか』を確認しやすいようにいたしました。また農業が生活にどれほど密着していたかを知るという観点から「農耕に伴う儀礼」という章も設けました。以上は、すべて『分かりやすく簡単に』を基本としたものです。したがって、それぞれの記載は専門の方々にとって物足りない面があるとは思いますが、御了承の程お願い申し上げます。市内の農具、農業習俗及び農業の儀礼調査につきましては、今後聞き取り調査をしながら、農具の収集にも努めてまいりたいと考えておりますので、より一層の皆様方の御指導、御協力を心よりお願いしたいと存じます。

昨今、農業の様々な問題が日々新聞をにぎわせています。日本における稲作は、千年を超える歴史の中で日本独自の文化として培われてきました。本書に書かれております農具の一つ一つや、一年の様々な行事の中で綿々と今日へ受け継がれてきているものです。このような視点で農業問題を見てみると今までとは違った面も見えてくるのではないのでしょうか。本書がその一助となれば本当に幸いであると思います。

最後になりましたが、本冊子が一人でも多くの方々に活用されることを、心よりお願い申し上げます。

平成3年6月

編集責任者

宇都宮市教育委員会

文化課長 安 達 光 政

## 参 考 文 献

下房地方の民具	成田山靈光館	昭和47年
民具入門	宮本馨太郎著 慶友社	昭和48年
下野の民具①	栃木県立郷土資料館	昭和50年
下野の民具②	栃木県立郷土資料館	昭和51年
民俗学辞典	民俗学研究所編 東京堂出版	昭和53年
栃木県の年中行事	尾島利雄・山中清次共著 第一法規出版	昭和54年
農民生活史事典	秋山高志他編 柏書房	昭和54年
栃木県大百科事典	栃木県大百科事典刊行会	昭和55年
栃木県の稲作習俗	栃木県立郷土資料館	昭和55年
古山・中塩原の民俗	栃木県立郷土資料館	昭和56年
世界大百科事典	平凡社	昭和56年
秋山の民俗	栃木県立郷土資料館	昭和57年
民俗探訪事典	大島暁雄他監修 山川出版社	昭和58年
栃木県方言事典	森下喜一著 桜桐社	昭和58年
民俗の事典	大間知篤三他編 岩崎美術社	昭和59年
日本民俗事典	大塚民俗学会編 孔文堂	昭和61年
農 具	茨城県立歴史館	昭和61年
民具実測図の方法	平凡社	昭和63年
野木町史	野木町	昭和63年
昔の米づくりと農具	志波姫町教育委員会	平成元年
宇都宮市文化財シリーズ 第1～10集	宇都宮市教育委員会	昭和44年～平成元年
栃木県民俗事典	下野民俗研究会編	平成2年

文化財保護シンボルマークについて



このマークは文化財愛護運動の一環として昭和41年5月に定められたもので、ひろげた両方の手のひらのパターンによって日本建築の重要な要素である斗拱のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより文化財という民族の遺産を過去・現在・未来へと永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

平成3年6月28日発行

宇都宮の農具

発行 宇都宮市教育委員会  
編集 宇都宮市教育委員会文化課  
表紙題字 桜井敬朔  
印刷所 (有)井上総合印刷所



文化財愛護  
シンボルマーク

文化財シリーズ第11号

